福岡市埋蔵文化財調査報告書　第893集

博 多 1 0 7

－博多遺跡群 第148次調査報告－

2 0 0 6

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行って記録保存という形で往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成16年度に行いました、博多148次調査の内容について報告するものです。この調査では古代末～中世前半期の遺構を中心とする数多くの遺構、遺物を検出することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました、株式会社エバーライフをはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木 とみ子

ー例　言ー

・本書は福岡市教育委員会が2004年７月20日から９月28日にかけて行った博多148次調査（博多区冷泉町488番２）の報告である。調査は藏冨士寛が担当した。

・出土銅銭については、福岡市埋蔵文化財センターにクリーニングをお願いした。そして、製図・執筆等は埋蔵文化財センター片多雅樹氏の手によるものである。

・本書における輸入陶磁器の分類については、以下の文献を参考にした。
太宰府市教育委員会編1983『大宰府条坊跡』XV　太宰府市の文化財　第49集

・本書の編集は藏冨士が行った。実測・トレースも藏冨士による。尚、遺物実測の一部は米倉法子、山崎賀世子の手を煩わせた。

・本書における方位は座標北であり、遺構については、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、墓（ST）等の略称を使用している。

・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

１．調査に至る経緯…… 1

２．調査の組織…… 1

Ⅱ．調査の経過…… 2

１．位置と環境…… 2

２．調査の方法…… 2

Ⅲ．調査の記録…… 3

１．遺跡の概要…… 3

２．遺構・遺物…… 3

1）SE（井戸）…… 3

2）SK（土坑）…… 9

3）SD（溝）…… 23

4）ST（甕棺墓）…… 26

5）その他の遺物…… 27

Ⅳ．まとめ…… 32

図・表　目　次

図１　博多遺跡群（1/25,000）…… 2
図２　調査区位置（1/4,000）…… 3
図３　遺構配置（1/100）…… 4
図４　SE063・082出土遺物（1/3）…… 5
図５　SE063（1/40、1/3）…… 6
図６　SE067（1/40、1/3）…… 7
図７　SE082（1/40）…… 8
図８　SE082出土遺物（1/3）…… 8
図９　SE106（1/40、1/3）…… 9
図10　SK096（1/40、1/3）…… 10
図11　SK098（1/40）…… 11
図12　SK098出土遺物（1/3）…… 12
図13　SK100（1/40、1/3）…… 13
図14　SK100出土遺物2（1/3）…… 14
図15　SE127（1/40、1/3）…… 15
図16　SK031（1/40、1/3）…… 16
図17　SK043・053・080（1/40、1/3）… 17
図18　SK054・059・061（1/40）…… 18
図19　SK059・061出土遺物（1/3）…… 19
図20　SK068・069（1/40、1/3）…… 20
図21　SK090（1/40、1/3）…… 21
図22　SK095（1/40、1/3）…… 22
図23　SK101（1/40、1/3）…… 23
図24　SK049・050（1/40、1/3）…… 24
図25　SK051（1/40、1/3）…… 25
図26　SK051出土遺物２（1/3）…… 25
図27　SD064（1/60）…… 26
図28　SD064出土遺物（1/3）…… 27
図29　ST079（1/30、1/8）…… 28
図30　銅銭（2/3）…… 28
図31　鋳造関係遺物・ガラス製品（1/4、1/2）29
図32　墨書土器（1/4）…… 29
図33　弥生・古墳時代遺物（1/6、1/3、1/2）30

表１　銭銘別出土銅銭一覧
表２　遺構別出土銅銭一覧

図　版　目　次

図版１　上 調査区南東側（北西から）　下 調査区南東側遺構分布状況（東から）
図版２　上 調査区北西側（南から）　下 調査区北西側２（南西から）
図版３　上 SE068（南東から）　中 SE068土層（南東から）　下 SE106（南東から）
図版４　上 SK007（北東から）　中 SK018（北東から）　下 SK049・050・051（北から）
図版５　上 SK031（南から）　中 SK098・100・127（南から）　下 SK095遺物出土状況（南から）
図版６　上 SK049・050（東から）　中 SK068・069（南西から）　下 SK101（西から）
図版７　上 SD064（西から）　中 ST079検出状況（西から）　下 ST079完掘（西から）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成15年11月17日、株式会社エバーライフより、博多区冷泉町482-2他における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。この地点は博多遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査を行い、現地表下240cmの地点で遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることとなった。

発掘調査の開始は7月20日。9月28日にすべての作業を終了した。調査にあたって、株式会社エバーライフを始めとする関係各位には、多大な御協力を賜った。記して感謝したい。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　株式会社エバーライフ
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課 課長　山口譲治
　　調査第２係長　池崎譲二
調査庶務　鈴木由喜
調査担当　調査第２係　藏冨士寛
調査作業　寺園恵美子　小路丸嘉人　永田優子　池聖子　小池温子　増田ゆかり　中野裕子
　　永田律子　阿部幸子　早川　浩　幸田信乃　夏秋弘子　吉川暢子　薗部保寿
整理作業　柴田加津子　萩本恵子　日名子節子

遺跡調査番号	0436		遺跡略号	HKT-148	
地番	博多区冷泉町488番2		分布地図番号	48　千代博多	
開発面積	258㎡	調査対象面積	235㎡	調査面積	204㎡
調査期間	2004.7.20～2004.9.28				

Ⅱ．調査の経過

1．位置と環境

博多遺跡群は古代末～中世を中心とし、存続期間は弥生時代から近世にいたる複合遺跡であり、福岡平野を流れる那珂川、御笠川に挟まれた砂丘上に存在する（図1）。この砂丘は東西に長い3列の砂丘によって形成されており、通常、内陸側の2列を「博多濱」、外側の1列を「息濱」と呼んでいる。今次調査地点は「博多濱」のほぼ中央部、砂丘の高所部分に位置している。近隣においては、北西側50ｍの地点において10次調査、南東側100ｍの地点において44次調査が行われている（図2）。

10次調査は54m²という狭い調査ながら、弥生土器、古墳時代土師器を含む、11世紀後半～16世紀にいたる多くの遺物が出土している（池崎・折尾編1981）。また、第44次調査は1989年に計4面の調査が行われ、その際、8～9世紀代の井戸を始めとして、11～12世紀前半代を中心とする多くの遺構が検出されている（佐藤編1991）。

池崎譲二・折尾　学編1981『博多Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第66集
佐藤一郎編1991『博多19』－博多遺跡群第44次発掘調査概報－　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第247集

2．調査の方法

調査はまず、表土および攪乱土の搬出より開始した。深さ2ｍにも及ぶそれらを除去し、標高4ｍ前後の暗黄褐色砂層上に遺構面を設定し、調査を開始した。基本的には1面のみの調査だが、数度に渡る砂層（暗黄褐色砂層・黄褐色砂層）の切り下げを行い、遺構の精査に努めた（図3　青線遺構など）。尚、排土処理の関係から調査区を2分して調査を行っている。

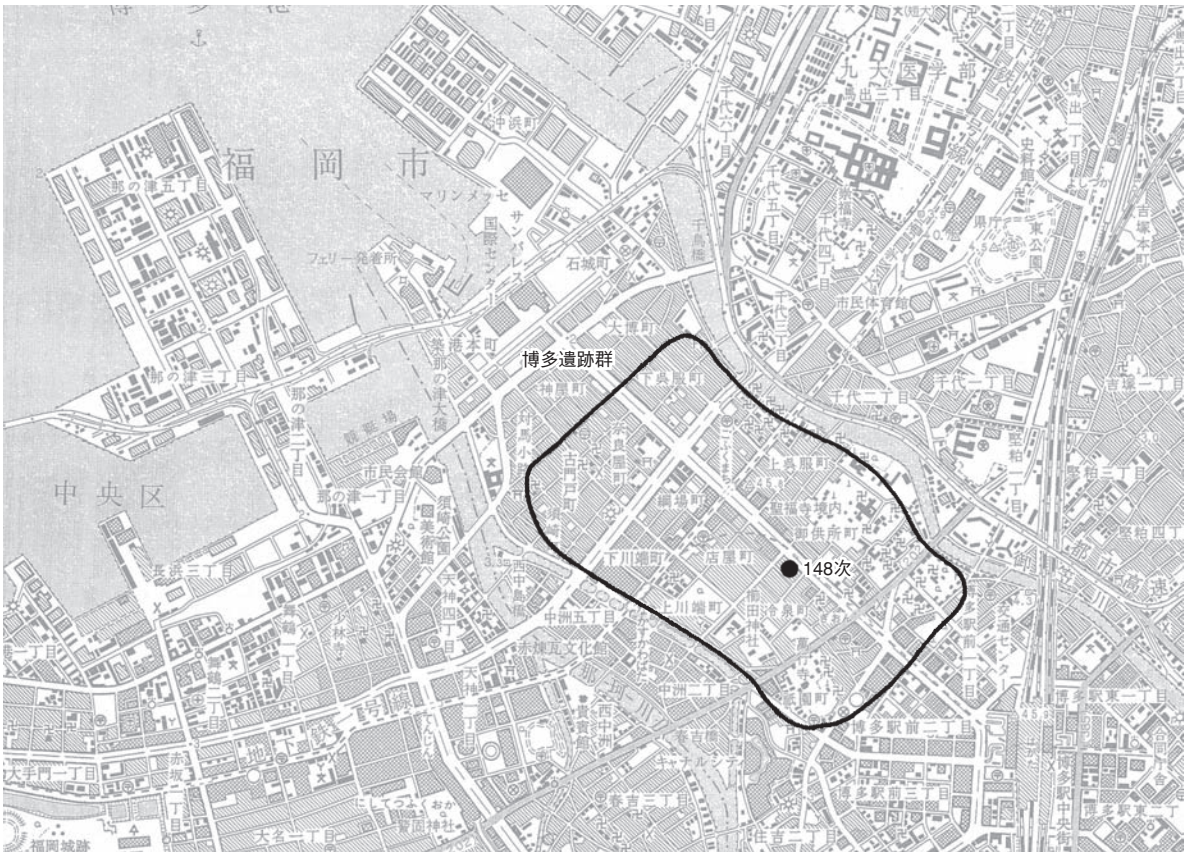


図1　博多遺跡群（1/25,000）

Ⅲ．調査の記録

1．遺跡の概要

今次調査では、古代末～中世・近世にかけての井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）等の遺構が多数検出された（図3）。遺構は調査区全体に濃密に広がっており、古代末～中世前半のものが主体を占める。また、砂層の切り下げを行っている際、弥生時代終末の甕棺が1基、見つかっている。また、調査区内では、弥生時代中・後期～古墳時代前期にかけての遺物がいくつか採集できており、決して密度の濃いものではないが、周辺における当該期の遺構の広がりも推定できよう。遺物は弥生土器、土師器、輸入陶磁器などがコンテナ110箱分出土している。

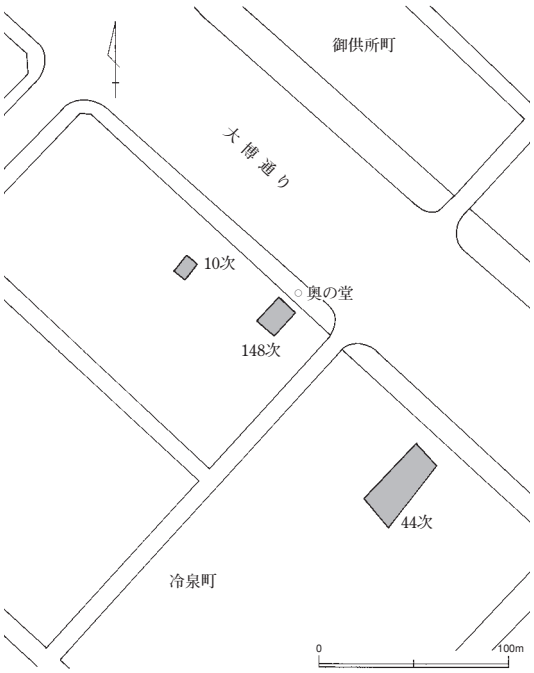


図2　調査区位置（1/4,000）

2．遺構・遺物

以下では、遺構の種類ごとにその内容、出土遺物について述べる。

1）SE（井戸）

井戸は計8基が検出できた。SE001～003・014は近世以降のもので、いずれも瓦組の井戸側を持つ。尚、SKの中には平面円形を呈し、深い掘り込みを持つものがあるが、これらの中にも本来井戸であったものが含まれている可能性もあるだろう。

SE063（図5）　調査区中央南西寄りに存在する。一部のみの検出であり、SD064に切り込まれ、SE082を切り込んでいる。完掘後の平面形をみれば径4ｍ以上を測る円形を呈しているのであるが、土層を観察すれば、この形態は複数遺構の切り合いの結果、生じたものであることが分かる。底面がややいびつなのもそのためであろう。土層の一部に不連続面が垂直方向にのびており、063が井戸（SE）であった可能性が高い。現状の深さは1.3ｍほど。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図4・5）　当初、遺構の認識を誤っていたので、掘り下げ途中の遺物である図4は、SE082出土のものや時期的に後出するものが混在している。1～3、6～8は白磁である。1は口縁部にやや大振りな玉縁を有する。椀Ⅳ類。2はⅢで、器高は低く、杯部は浅い。杯部半ばで内湾し、口縁部近くでは緩やかに外反する。3はやや小振りな椀で、口縁部近くがわずかに外反する。高台内部の削りは浅い。6～8は底部片。6は高台が細く高いもので、椀Ⅴ類に相当する。8は高台内部の削りが浅く、底部は厚いもので椀Ⅳ類、7は椀Ⅱ類に該当するだろう。4は磁州窯系緑釉陶器盤の一部（口縁部近く）か。5は越州窯系青磁椀の底部片。底部内面に目跡が残る。椀Ⅰ類。9・10は龍泉窯系青磁椀の底部片。高台内の削りは浅く、底部は厚い。9は内面に片彫文、10は片彫蓮花文を施す。いずれも椀Ⅰ類。11～21は土師器杯、22～37はⅢである。26は底部に板目が残る。すべての底部はすべて糸切りによる。

SK050
SK049
SK051
SE003
SK007
ST079
SK061
SE002
SK018
SK059
SK054
SE063
SK043
SK026
SK080
SD064
SK053
SK031
SK042
SK070
SE001
SK068
SE082
65810
SE014
SK069
SK095
SE106
SK072
SK068
SD105
SD102
SK090
SK100
SK101
SK127
SK097
SK098
SK089
SK126
SK094
SK096
SK091
54340
65820
0
2m

図3　遺構配置（1/100）

図5の遺物はSE063に伴うものである。1～3、6・7は白磁である。1は椀で、高台は細く高い。内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。口縁部は屈折し、上端部を水平に仕上げており、端部は鋭い。椀Ⅷ－1類に相当する。2は椀口縁部片で、口縁部には玉縁を有する。椀Ⅳ類。3は皿で、底部は厚く、口縁部はわずかに外反する。6・7は椀底部片で、6は細く高い高台を有し、Ⅴ類に属する。7は底部が厚く、幅広の高台を有しており、Ⅳ類に相当する。4は龍泉窯系青磁椀の底部片である。高台内の削りは浅く、底部は厚い。内面には片彫蓮花文を有する。椀Ⅰ－2類。5は同安窯系青磁の底部片で、見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。外面には粗い縦の櫛目文、内面には短い櫛目文を施している。Ⅲ－2類に相当する。8・9は耳壷であり、同一個体である可能性もある。胎土は赤褐～暗赤褐色を呈し、釉は暗茶～緑褐色を呈する。頸部には1条の沈線、把手下には波状の沈線を1条、それぞれ施している。10～17は土師器杯、18～21は皿である。すべて底部は糸切りで、10・11・15・20は板目の圧痕を残す。21は混入によるものか。

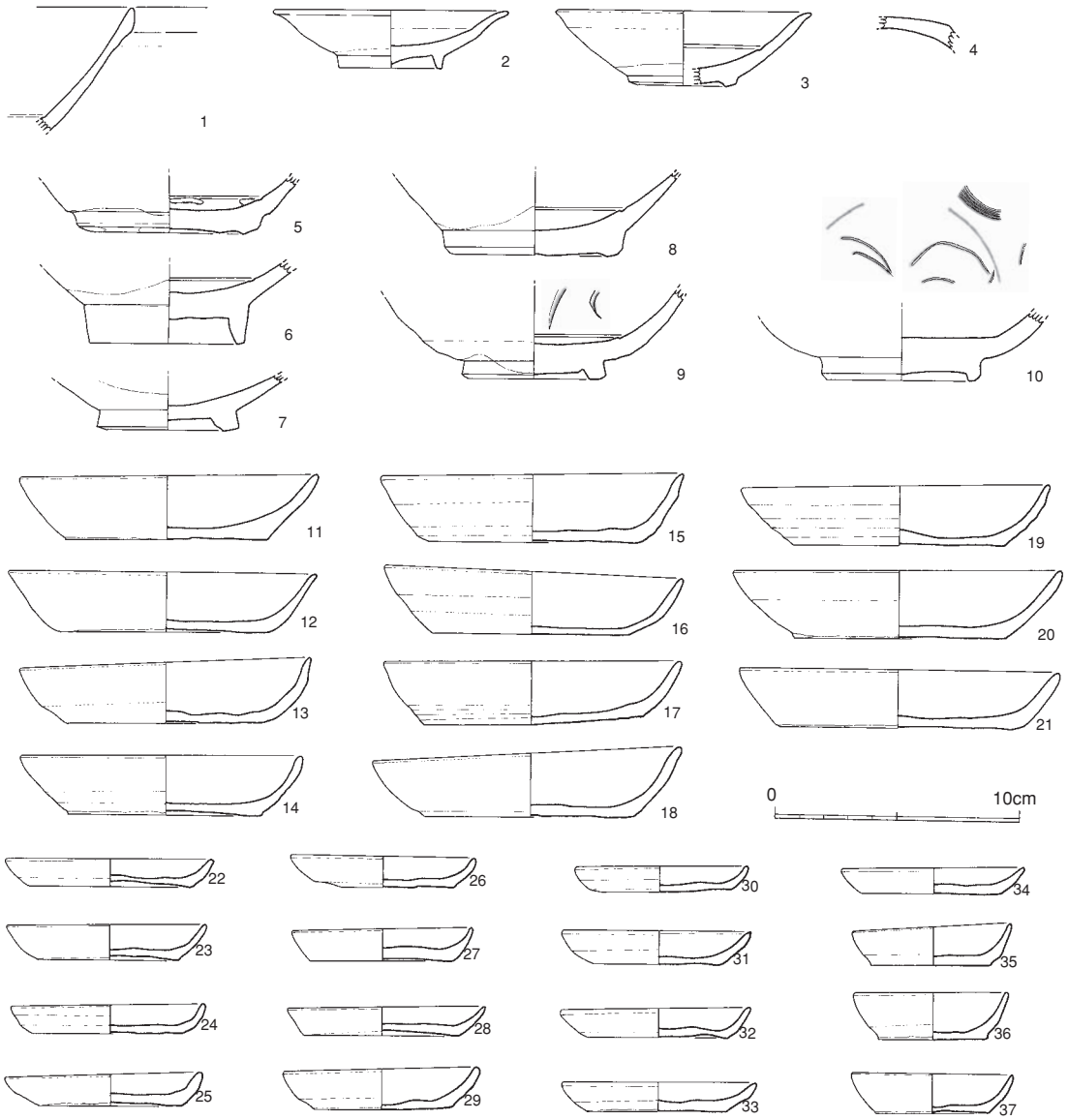
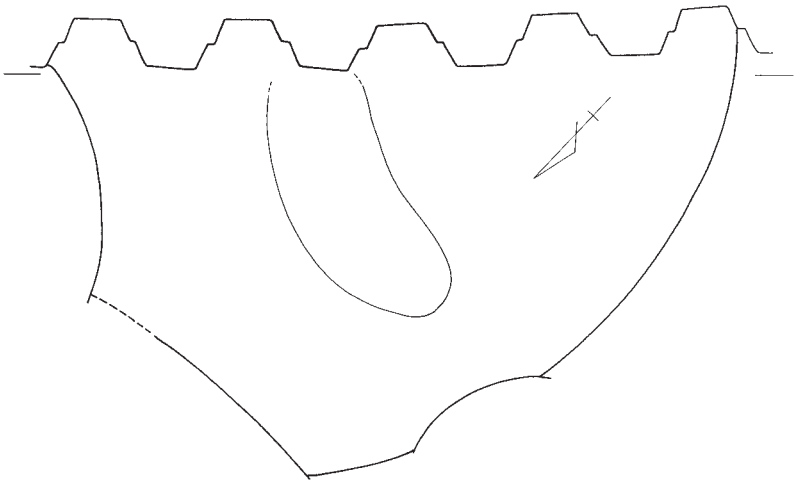
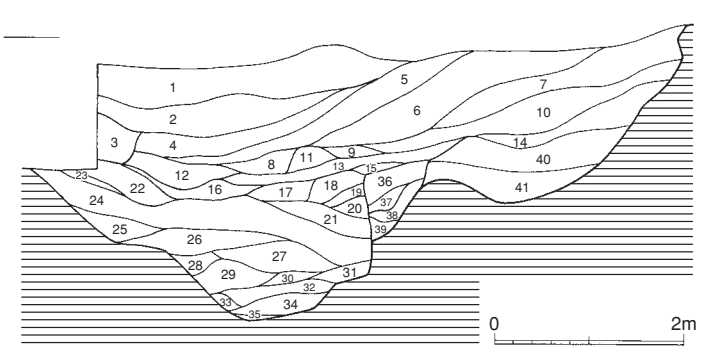


図4　SE063・082出土遺物（1/3）





1 黒褐色
2 黒褐色
3 黒褐色
4 暗赤褐色
5 暗黄褐色
6 暗褐色
7 暗黄褐色
8 黄褐色
9 黄褐色
10 暗褐色
11 暗褐色
12 暗赤褐色
13 暗赤褐色
14 暗赤褐色
15 暗赤褐色
16 黄褐色
17 褐色
18 黒褐色
19 黄褐色
20 暗褐色
21 黄褐色
22 褐色
23 暗褐色
24 暗褐色
25 黄褐色
26 褐色
27 褐色
28 暗褐色
29 黄褐色
30 暗褐色
31 黄褐色
32 暗褐色
33 黄褐色
34 暗褐色
35 暗褐色
36 褐色
37 褐色
38 暗褐色
39 黄褐色
40 暗褐色
41 黄褐色

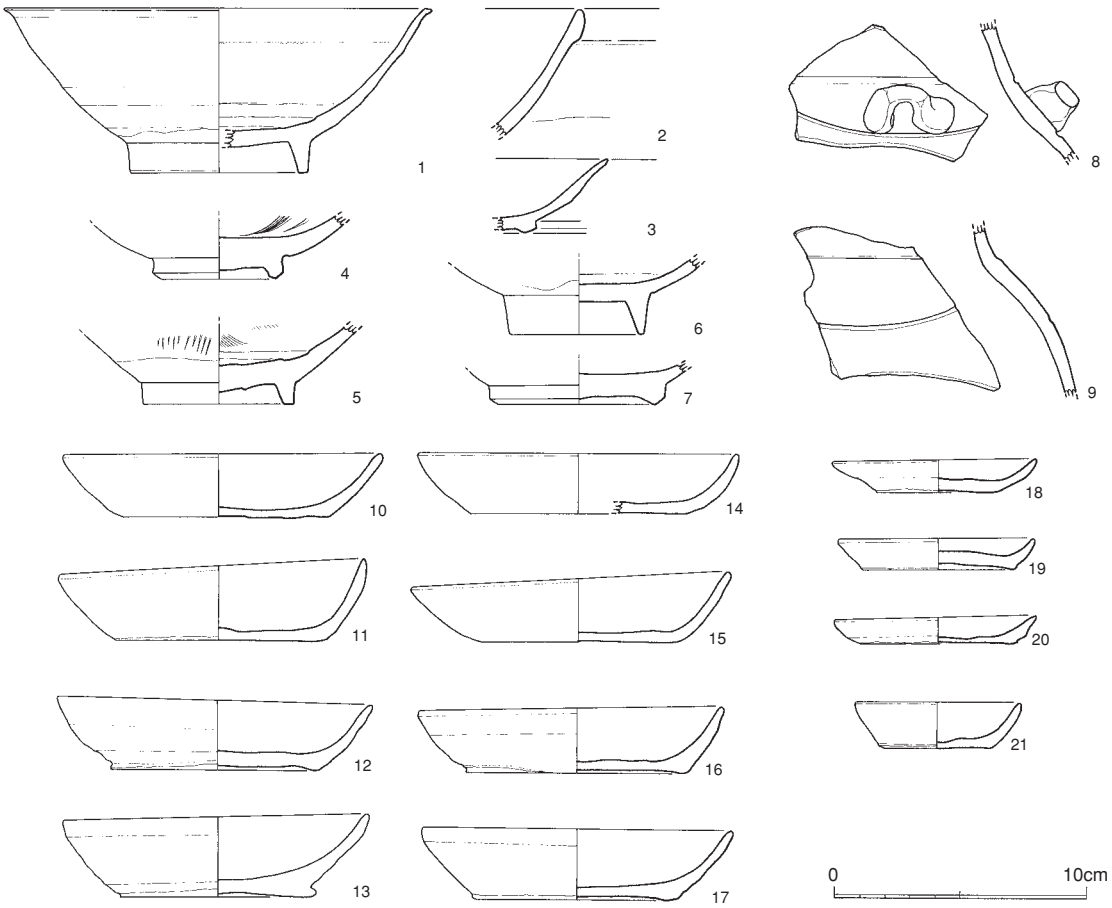


図5　SE063（1/40、1/3）

SE067（図6）

調査区中央やや西寄りに存在し、攪乱により一部を失っている。一辺1.7～1.8ｍの方形を呈し、深さは0.5ｍを測る。検出面ではやや隅丸のプランを呈しているが、底面は1.4～1.6ｍの略方形をなしており、この形が井戸本来の形態を示しているといえよう。底面隅部には10～14cmのピットが存在しており、これが隅柱に相当するのであろう。この隅柱は土層でも観察できる。従って、この井戸は板組の井戸側を有していた可能性が高い。また、井戸の中心部には更に15cmほど、平面方形の窪みが存在する。出土遺物より、11世紀後半に位置づけることができる。

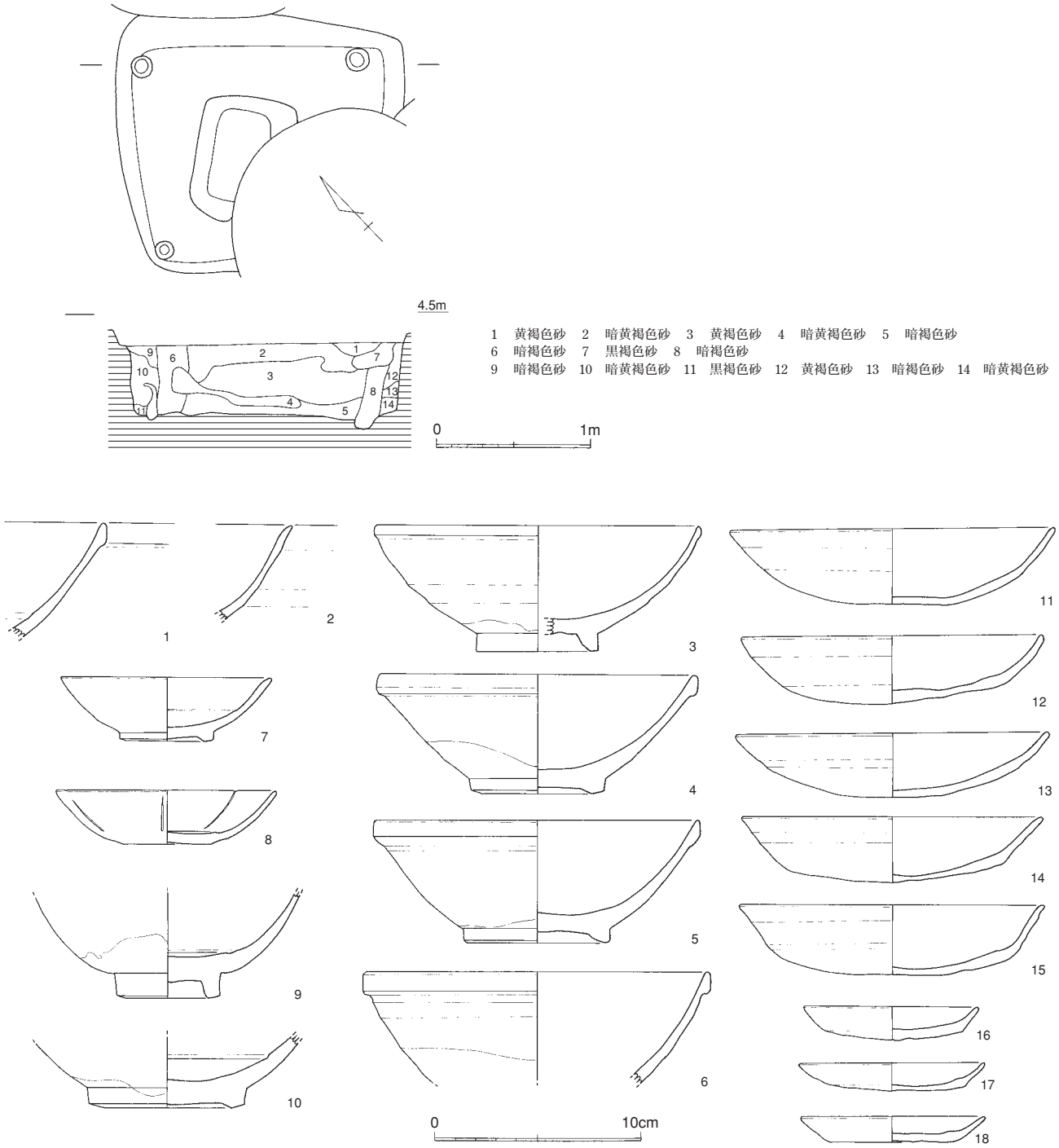


図6　SE067（1/40、1/3）

出土遺物（図6）　1～10は白磁である。1・4・5・6は口縁部に大振りな玉縁を有するもので、椀Ⅳ類。2は口縁部がわずかに外反するもので、端部は丸く収めている。椀Ⅴ類。3は小さな玉縁を有するもので、椀Ⅱ類に相当する。9・10は椀の底部片。9は比較的高い高台を有し、杯部は丸みを持つ。10は高台内の削りは浅く、底部は厚みを帯びる。椀Ⅳ類。7・8は皿である。8は底部がわずかに上げ底状を呈している。口縁端部に輪花を有し、外器面には縦篦文、内器面には白堆線を有している。11～15は丸底杯。16～18は土師皿で、底部はヘラ切りによる。いずれも底部に板目の圧痕を残している。

SE082（図7）　調査区中央やや西寄りに存在し、SE063やSD064に切り込まれる。平面は径2.5～2.8ｍのいびつな円形を呈し、深さは1.2ｍを測る。堀方はやや直線的ですり鉢状を呈し、底面には径0.6ｍ、深さ0.5ｍの凹部がある。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図8）　1・3・4は白磁である。1は椀底部で、高台内の削りは浅く、底部は厚みを帯びている。Ⅳ類。3は皿で、底部は若干上げ底を呈し、杯部は半ばで折れ、わずかに内湾する。4は水注の頸部片。2・5・6は青磁である。2は龍泉窯系青磁の皿で、底部はわずかに上げ底を呈し、杯部は半ばで折れ、上半部は急角度で立ち上がっている。5・6は同安窯系青磁の椀である。いずれも椀Ⅰ類に属する。5は外器面に細かい縦の櫛目文、内器面にヘラ描の花文とジグザグ状の点描文をそれぞれ施す。6は外器面に粗い縦の櫛目文を有する。

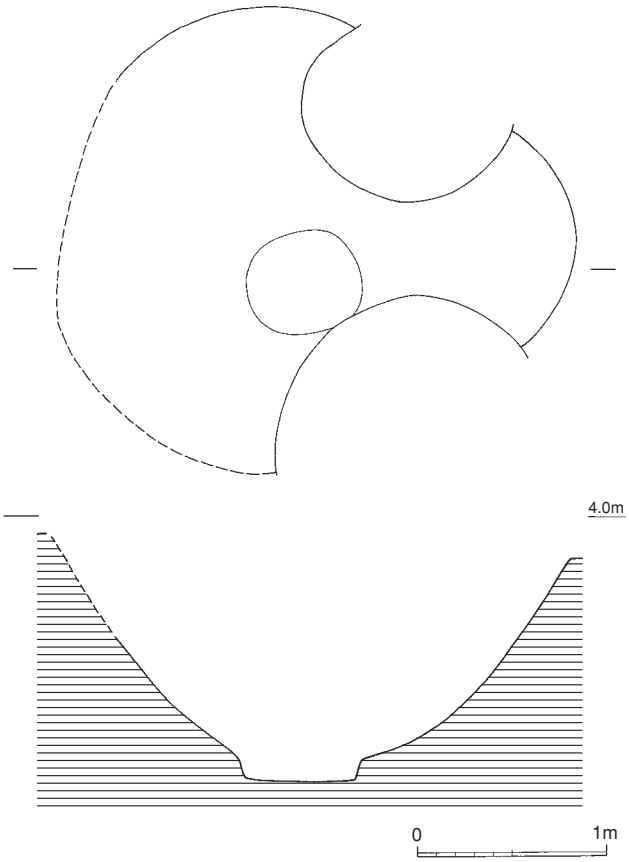


図7　SE082（1/40）

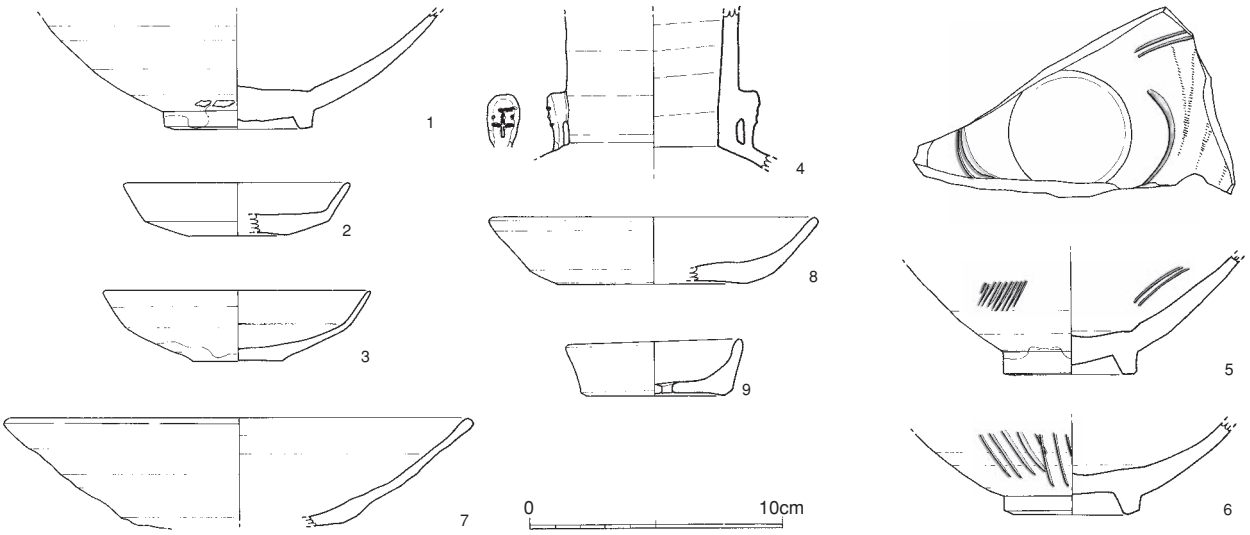


図8　SE082出土遺物（1/3）

17は丸底杯。8・9は土師器杯である。9は底部に穿孔が施されている。いずれも底部は糸切りによる。

SE106（図9）　調査区中央の北寄りに位置する。平面は1.6～1.8ｍの円形を呈し、深さ２ｍ程を測る。掘り込みは急角度で、標高2.5ｍ以下から、堀方は一辺0.8ｍを測る方形のものへと変化する。痕跡としては確認していないが、井戸側が板組であった可能性が高い。底面には径0.5ｍ、深さ15cm程の凹部がある。出土遺物は少ないが、11世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図9）　1は土師器皿である。底部はヘラ切りによるもので、板目の圧痕が残る。2は白磁椀の口縁部片である。口縁部には小さな玉縁を有する。3は土師器椀の口縁部片である。

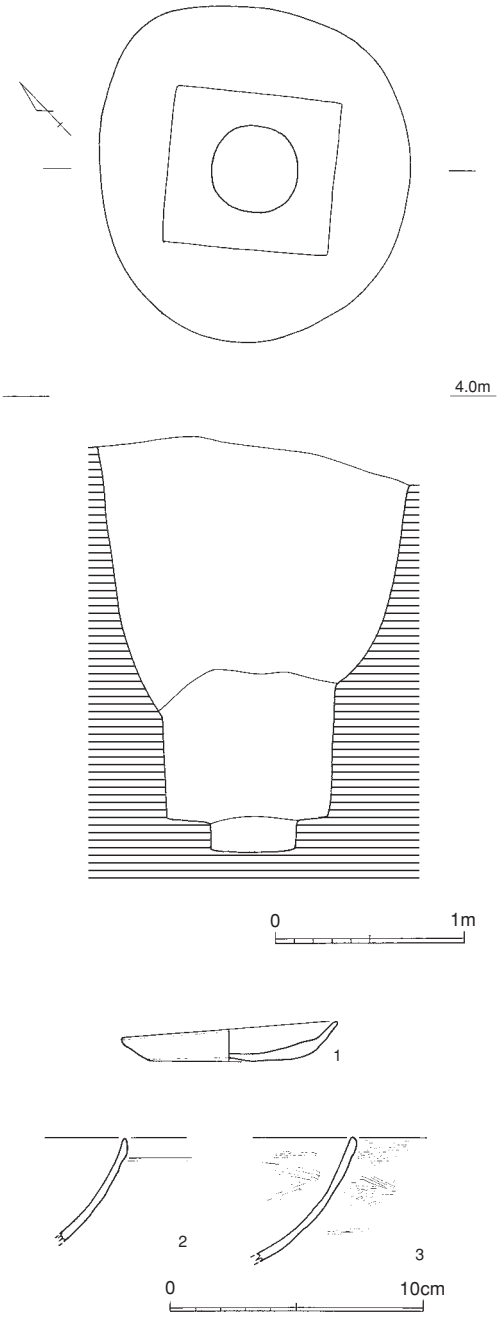


図9　SE106（1/40、1/3）

2）SK（土坑）

今次調査では多くの土坑を検出している。SK007・018・070・091はいずれも近世以降に位置づけられるものである。SK026・042・089・094・097はいずれも掘り込みを有するものであるが、調査区際の遺構であるため、完掘には至っていない。出土遺物をみれば、これら遺構は12世紀代を中心とするものである可能性が高い。

SK096（図10）　調査区北東端部に存在するもので、SK098・SK094に切り込まれている。平面は径２ｍほどの円形を呈し、深さは2.4ｍを測る。立ち上がりは急で、底面は広く、平坦である。

尚、この土坑からは古墳時代初頭の壷形土器が出土している（図33～３・４）。SK096はＳＫ126を切り込んでいるが、SK126は埋土が淡褐色を呈し、他の遺構とは大きく異なる。SK126はごくわずかにしか残っておらず、時期比定に苦しむものであるが、埋土をみれば、弥生～古墳時代に位置づけられる可能性が高い。

従ってここでは、SK096出土の土師器はこのSK126に伴うものと判断することにしたい。SK096は出土遺物より、11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる。

出土遺物（図10）　1～3は白磁である。1は椀杯部片で、口縁端部はわずかに外反する。3は椀底部片。2は皿で、底部はわずかに上げ底を呈している。杯部はふくらみを持ち、口縁端部は外反し横方向へ突き出す。4・5は土師皿で、底部は糸切りによる。

SK098（図11）　調査区の北東寄りに位置する。SK096・127を切り込み、自身はSK100に切られる。平面は長さ2.4m、幅1.6ｍの楕円形を呈し、深さ2.5mを測る。立ち上がりは急で、壁面は直線

的である。底面は平坦で、長さ1.4ｍ、幅0.6ｍの楕円形を呈する。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図12）　1～3、6～9は白磁である。1は椀で口縁部には大振りな玉縁を有し、底部は厚く、高台内の削りは浅い。椀Ⅳ類に相当する。2・3は椀杯部片で、いずれも口縁端部が外反し、水平方向に張り出している。上端部は水平に仕上げる。椀Ⅴ類に該当する。5、7～9は杯底部片である。5・8・9はいずれも細くて高い高台を有するもので、椀Ⅴ類に相当する。9は内器面に短い櫛目文を施している。8は内面見込み部分を輪状に掻き取ったもので、椀Ⅷ類に属する。6はⅢ。高台を有し、内面見込み部分を輪状に掻き取っている。ⅢⅢ類。4は越州窯系青磁の椀底部片で、輪状高台を有し、内・外面に目跡が残っている。椀Ⅰ－2類。10～13は土師器杯で、14～16はⅢである。いずれも底部は糸切りで、10・11・13・14・15には板目の圧痕が残っている。17は瓦器椀。18は丸瓦片。凹面布目、凸面縄目のタタキ痕が残る。混入品だろうか。

SK100（図13）　調査区の北東寄りに位置する。SK098・127を切り込む。平面は径2ｍのややいびつな円形を呈し、深さは2.1ｍを測る。壁面の立ち上がりは急だが、底面に近づくにつれて緩やかになる。底面は比較的狭く、径0.9mの円形を呈している。出土遺物より、12世紀後半～13世紀前半に位置づけることができる。

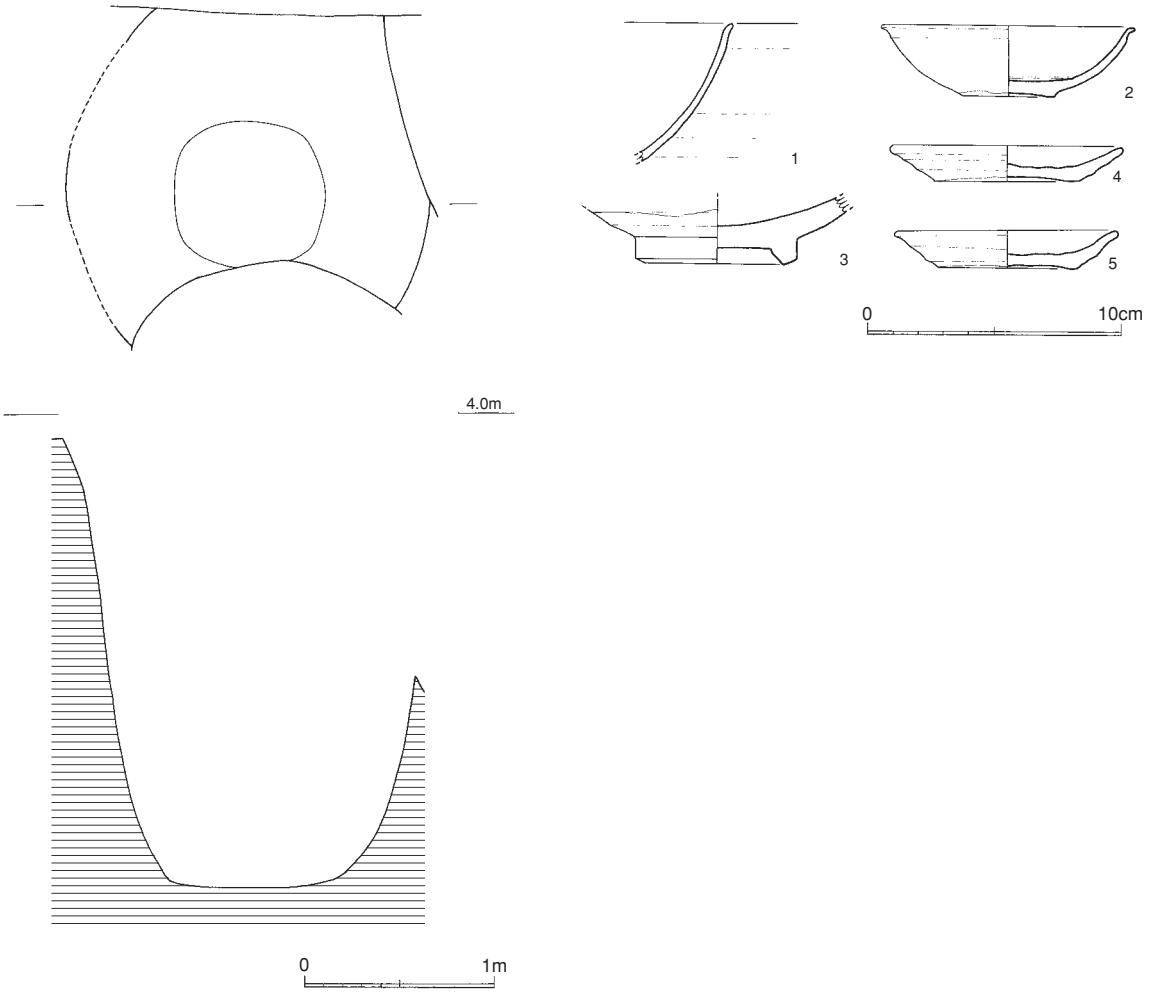


図10　SK096（1/40、1/3）

出土遺物（図13・14）　図14には輸入陶磁器、土師杯等を示している。1・2・4～9・11は白磁である。1は、口縁部に輪花を有し、内器面にはヘラ描文を施している。2は大振りな玉縁を有し、高台内の削りは浅い。Ⅳ類に相当する。4～6は椀底部片である。4は細くて高い高台を有し、Ⅴ類に該当する。5はⅡ類、6はⅣ類にそれぞれ当てはめることができるだろう。9・11は皿である。9は底部が平底で、体部は半ばで折れ口縁部はわずかに外反する。口辺部は薄く仕上げられている。11はわずかに上げ底を呈しており、体部は丸みを帯びている。内器面にはヘラ描文を施している。12は合子の蓋。3～8・10は龍泉窯系青磁である。3は椀口縁部片で、外器面には片彫による鎬蓮弁文を施している。椀Ⅱ－b類に相当する。7・8は椀底部片。高台は断面四角形で、内部の削りは浅く、底部は厚みを帯びる。両者とも内面見込み部分には印文を有し、7は「金玉満堂」と読める。椀Ⅰ-1c類に属する。10は皿である。底部は上げ底状となり、体部は半ばで折れ、口縁部は外反している。内面にはヘラ描文・櫛目文を有している。13は褐釉四耳壷の口縁部片である。頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚し、わずかに外反する。焼成は良好で、薄手のシャープな作りであり、胎土には砂粒を多く含んでいる。器面は暗赤褐色を呈する。14は軒平瓦で、波状押圧文を有する。15～33は土師杯である。いずれも底部は糸切りによる。その多くには板目の圧痕が残る。

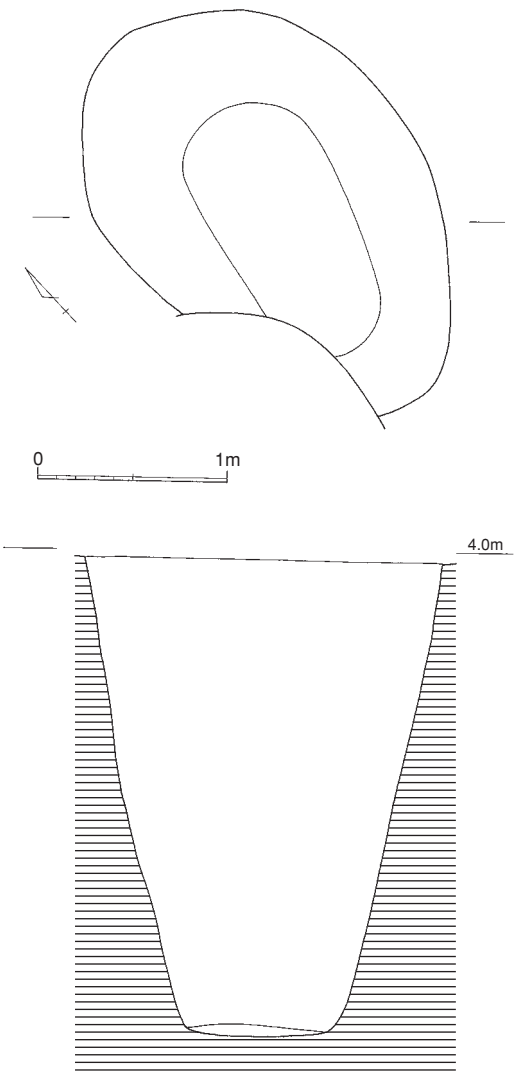


図11　SK098（1/40）

図13には土師皿を示している。底部はすべて糸切りで、底部には板目の圧痕が残る。

SK127（図15）　調査区の北東寄りに位置する。SK098・100等に切り込まれる。多くの遺構に切り込まれているため詳細は不明だが、平面は長さ3.6ｍ、幅1.8ｍ程の楕円形に復元できるだろう。長辺側の立ち上がりは急で、垂直に近いが、短辺側のそれは緩やかなものとなっている。底面はやや起伏があるがほぼ平坦。平面は楕円形を呈するのだろう。出土遺物は少ないが、12世紀の後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図15）　1は瓦器椀。2は越州窯系青磁椀の底部片。椀Ⅰ類に相当する。3は白磁底部片で、内面見込み部分を輪状に掻き取っている。椀Ⅷ類に属する。

SK031（図16）　調査区中央南西寄りに存在する。SK026・042等に切り込まれる。多くの遺構に切り込まれているため詳細は不明だが、径2.2ｍ程のいびつな円形に復元できるだろう。深さは0.2ｍ程と浅く、立ち上がりも緩やかである。底面は平坦だが、北西方向に向けて、やや傾斜する。12世紀後半に位置づけることができようか。

出土遺物（図16）　1～3は白磁椀である。1は口縁部に玉縁を有している。椀Ⅳ類。2は内面見込

み部分を輪状に掻き取るもので、椀Ⅷ類に属する。3は高台内の削りが浅いもので、椀Ⅳ類に相当しよう。4～7は土師杯、8～11は皿である。いずれも底部は糸切りによる。

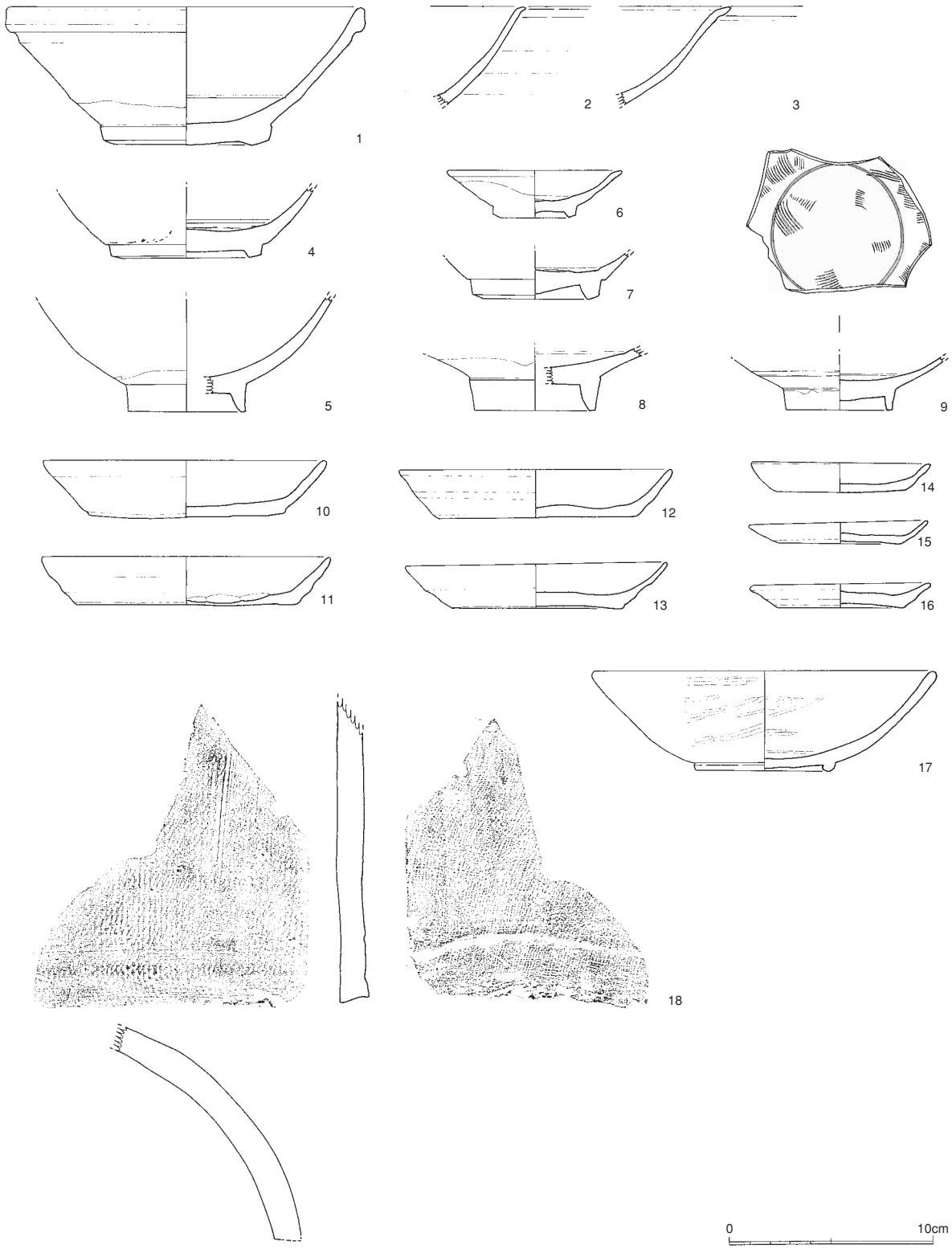


図12　SK098出土遺物（1/3）

SK043（図17）　調査区中央に位置し、一部をSK018・080に切り込まれる。平面は長さ2.4m、幅1.2mの楕円形を呈し、深さは0.5ｍ程を測る。立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の砂質土で、出土遺物は少ない。後述のようにSK053・080は12世紀後半に位置づけることができ、切り合いをみれば、SK043は少なくともそれ以前に位置づけることはできる。

SK053（図17）　調査区中央、SK043の北東側に位置する。長さ2.5m、幅1.5ｍの楕円形を呈し、深さは0.6ｍを測る。埋土は黒～褐色の砂～シルト質土で、炭化物も若干含む。立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦である。出土遺物をみれば、12世紀後半に位置づけ可能であろう。

出土遺物（図17）　1～3は白磁の椀である。1は口縁部に玉縁を有する。椀Ⅳ類。2・3はいずれも底部片である。2は内面見込み部分を輪状に掻き取るもので、椀Ⅷ類に属する。3は高台内の削りが浅く、底部が厚みを有するもので、Ⅳ類に相当する。4・5は土師杯、6は皿である。いずれも底部は糸切りによる。

SK080（図17）　調査区の中央に位置し、SK053に切り込まれる。詳細は不明だが、径1ｍ程のものといえようか。深さは0.6ｍを測り、ややすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色砂質土で、上層部分からは大量の土師椀・皿等が出土した。出土遺物からは、SK053とは大きな時期差を見いだすことができず、切り合いを有してはいるが、両SKとも近接した時期に営まれたものだろう。

出土遺物（図17）　7は龍泉窯系青磁の椀底部片で、内面見込み部分には片彫による花文を施している。8・9は土師杯、10・11は皿である。いずれも底部は糸切りによる。

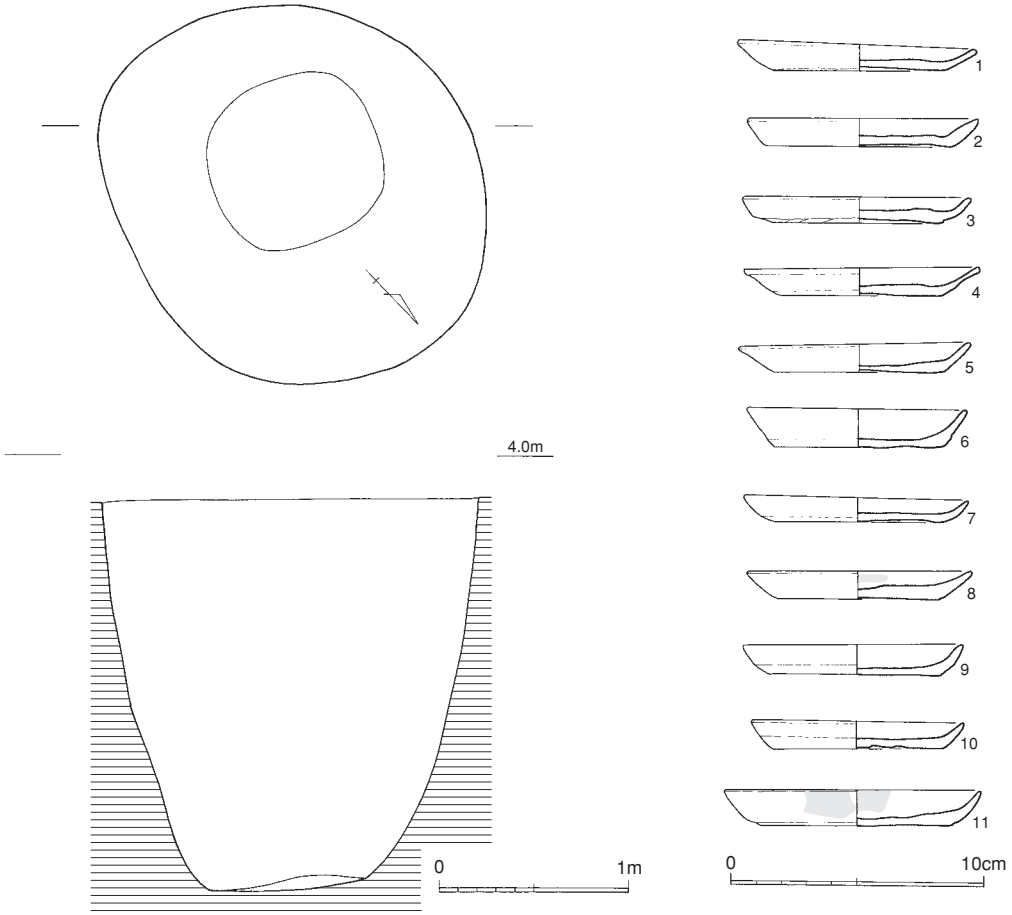


図13　SK100（1/40、1/3）

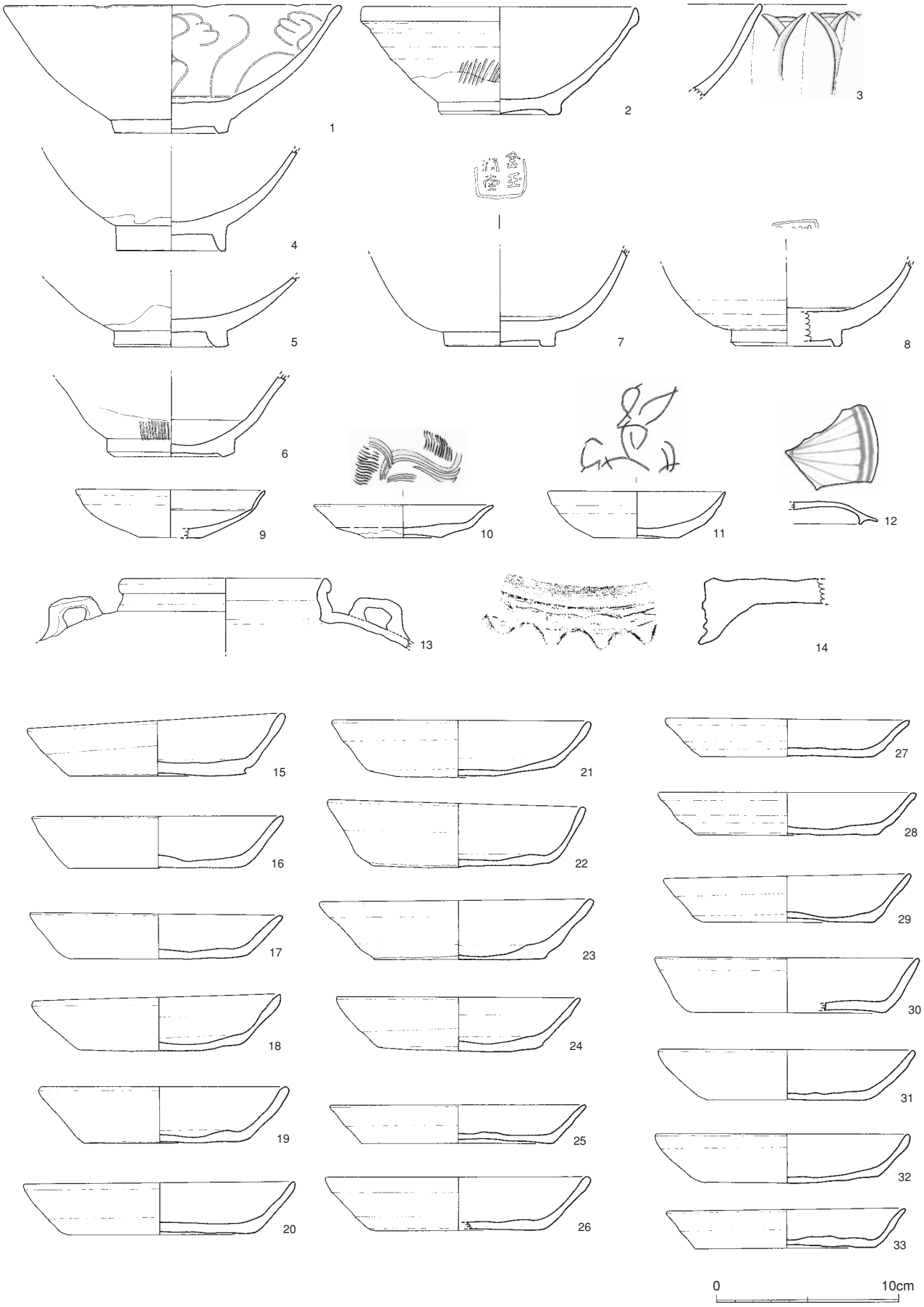


図14　SK100出土遺物2（1/3）

尚、検出当初、SK053・080を一括して認識していたため、両土坑における上層出土の遺物を混在させて取り上げている。それをSK053・080出土遺物とし、図17下に示した。12～23は土師杯、24～27は皿である。いずれも糸切りによるものであり、13・20・27は底部に板目の圧痕が残る。27は黒色土器（A類）に脚部を付したものである。以上の遺物は土師椀・皿等を主体となしており、また土層観察の結果からもSK080に伴うものである可能性が極めて高い。

SK059（図18）　調査区中央の南寄りに位置し、一部をSK002に切り込まれる。平面は径1ｍ程の円形を呈し、深さは0.6ｍを測る。立ち上がりは急で、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図19）　1は龍泉窯系青磁椀である。高台内の削りはわずかで、底部は厚い。内器面にはヘラ描文・櫛目文を施している。2～8は白磁椀である。2・3は口縁部片である。体部は直線的で、口縁端部は水平方向へ張り出しをみせる。椀Ⅷ類。4～8は底部片。2は内面見込み部分を輪状に掻き取っているもので、椀Ⅷ類に相当する。5～8はいずれも細く高い高台を有し、椀Ⅴ類に位置づけることができる。9～12は土師杯である。いずれも底部は糸切りによる。

当初、SK054・059・061は一つの土坑として認識していたため、これら土坑の上層部分に含まれていた遺物は混在している。これら土坑の遺物を一括して取り上げた資料を図19下に示している。13～20、27は白磁である。13は細く高い高台を有し、口縁端部は水平方向へ張り出しをみせている。椀Ⅴ類に該当する。14は椀口縁部片で、端部は張り出し、上面は平坦に仕上げられている。椀Ⅴ類に相当する。20は底部片で、細く高い高台を有する。椀Ⅴ類。15は内面見込み部分を輪状に掻き取っているもので、体部は直線的で、口縁端部は丸く収めている。椀Ⅷ類に相当する。16は口縁部に大振りな玉縁を有し、高台内の削りは浅く、底部は厚い。椀Ⅳ類に属する。17～19は皿。17は高台を有し、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。体部半ばで折れ、のち口縁部へは緩やかに外反している。18は平底を有するもので、体部は丸みを帯び、内湾している。19は平底で口縁端部は外方へ張り出している。27は瓶類の底部片。高台近くにまで釉が認められる。

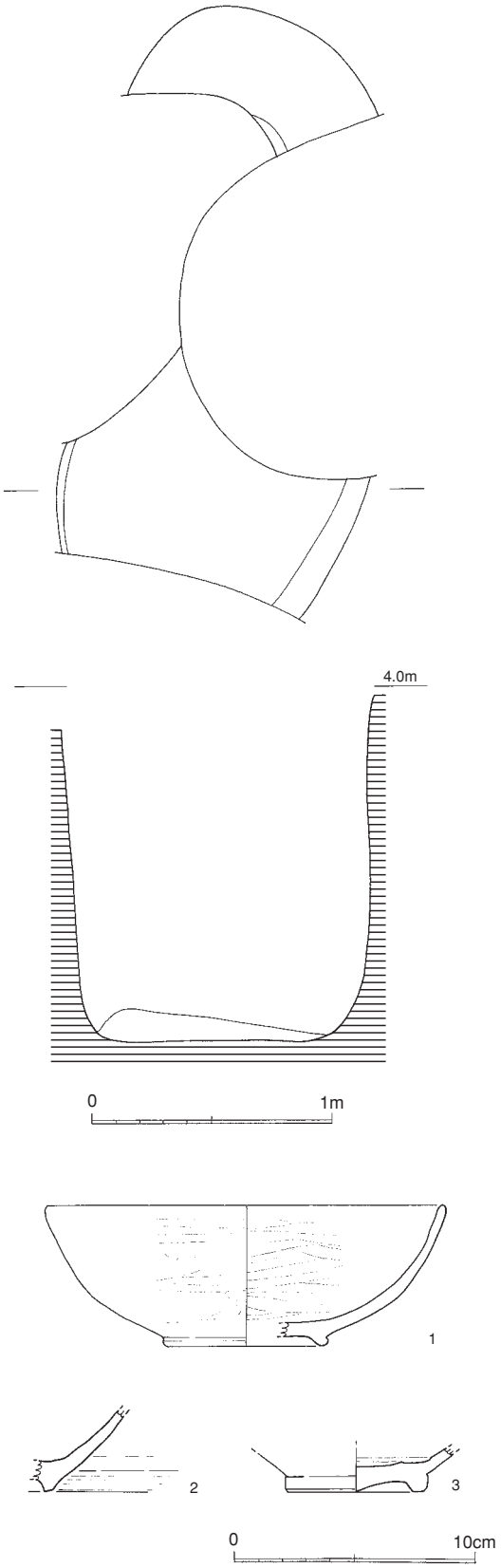


図15　SE127（1/40、1/3）

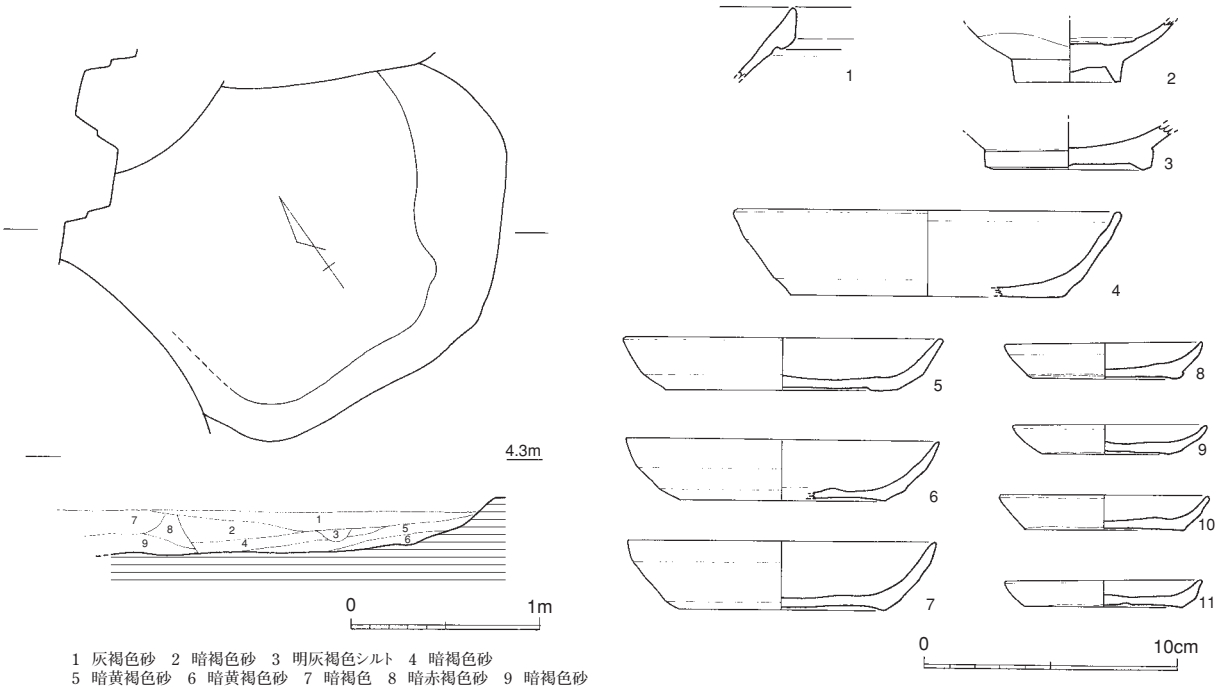


図16　SK031（1/40、1/3）

21・23は土師器杯、24～26はⅢである。いずれも底部は糸切りで、26の底部には板目の圧痕が残る。22は丸底杯である。以上の遺物は11世紀後半～12世紀代に位置づけることができる。

SK054（図18）　調査区中央の南寄りに位置し、SE063・SK059等に切り込まれる。一部が遺存するに過ぎないが、平面形は一部隅角をなしており、落ち込みではなく、遺構と判断している。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦である。先に述べたとおり、SK059等出土遺物の一部と混在しているため、SK054単独で出土した遺物は図示し得ない。

SK061（図18）　調査区中央の南寄りに位置し、多くをSE002に切り込まれる。平面は径50～70cmのいびつな円形を呈し、底面はやや丸みを帯びる。土坑の上半部には被熱の痕跡があった。この土坑からは鋳型、坩堝など、銅製品の鋳造に関連する遺物が数多く出土している（図31）。

SK068（図20）　調査区東端に存在する大形の土坑である。調査区際に存在するため、一部未掘である。不明な部分も多いが、平面は長さ2.6ｍ、幅11.5ｍ程の楕円形といえるだろうか。深さは0.8mを測り、壁面の立ち上がりは緩やかとなる。底面は平坦。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図20）　1～4、6～13は白磁である。1は口縁部片で、体部は丸みを帯び、口縁端部は外方へ張り出しを有する。内器面には短い櫛目文を施す。椀Ⅴ類。2は口縁部に大振りな玉縁を有するもので、椀Ⅳ類に相当する。3は細くて高い高台を有するもので、体部は丸みを有し、口縁端部は外方へと張り出している。また、口縁上端は平坦に仕上げられている。椀Ⅴ類に属する。4は瓶類の口縁部片。口縁端部は下方へと折れ曲がる。頸部には2条の沈線を施す。6はⅢ。高台を有し、内面見込み部分の釉は輪状に掻き取られている。ⅢⅢ－1類に相当する。7～11は椀の底部片である。7・8は細くて高い高台を有し、椀Ⅴ類に相当する。10・11は高台内の削りが浅く、底部が厚みを有するもので、椀Ⅳ類。9・12は内面見込み部分の釉を輪状に掻き取るもので、Ⅷ類に属する。14は土師杯、15はⅢで、いずれも底部は糸切り。

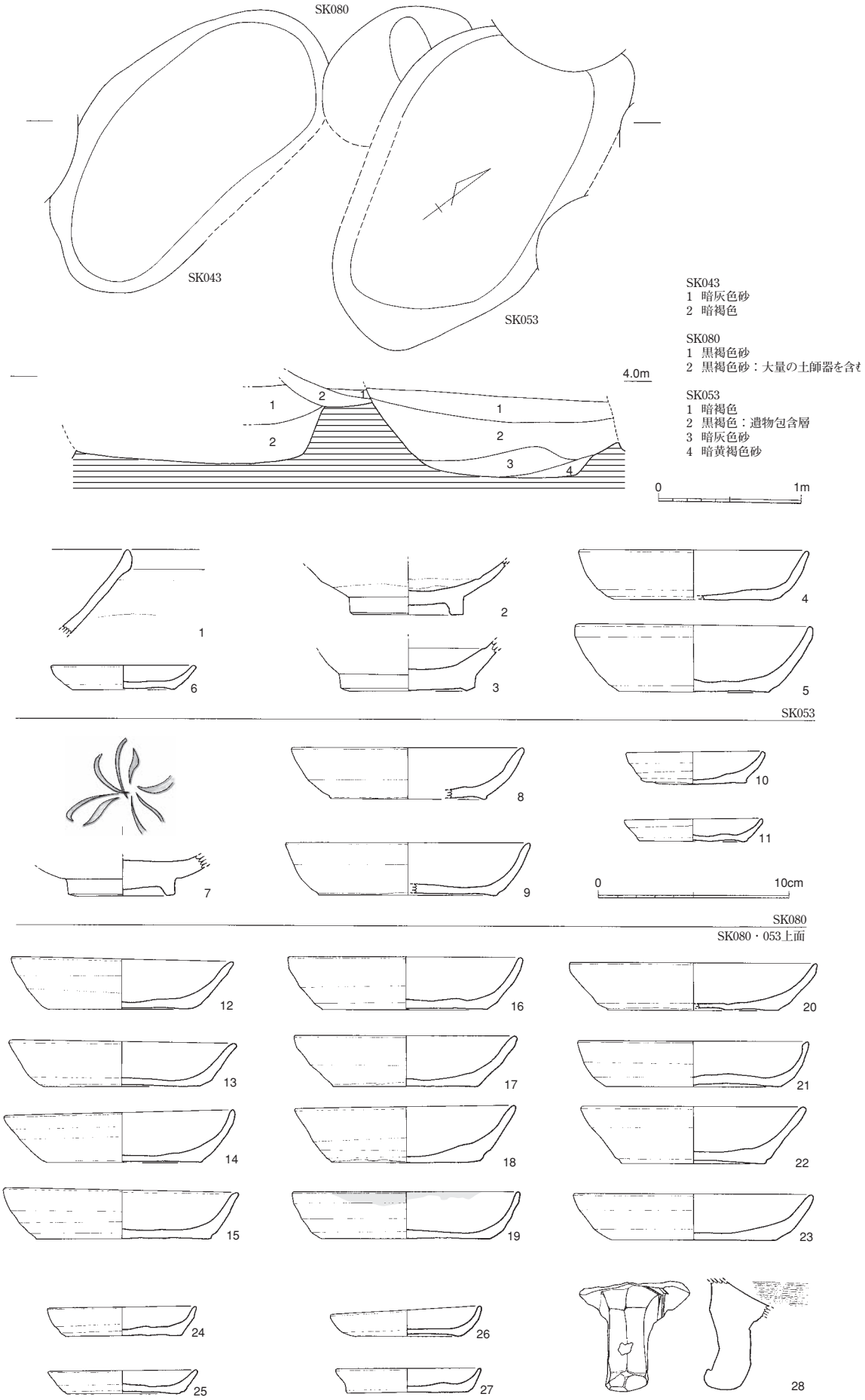


図17　SK043・053・080（1/40、1/3）

SK069（図20）　調査区東端に存在し、その大半をSK068に切り込まれているため、全形は不明。立ち上がりは緩やかで、底面も東側へ向かってわずかに傾斜している。出土遺物は少なく詳細は不明だが、11世紀後半～12世紀代の遺構であろう。

出土遺物（図20）　16・17は瓦器椀である。18は白磁椀の底部片。Ⅳ類に相当する。

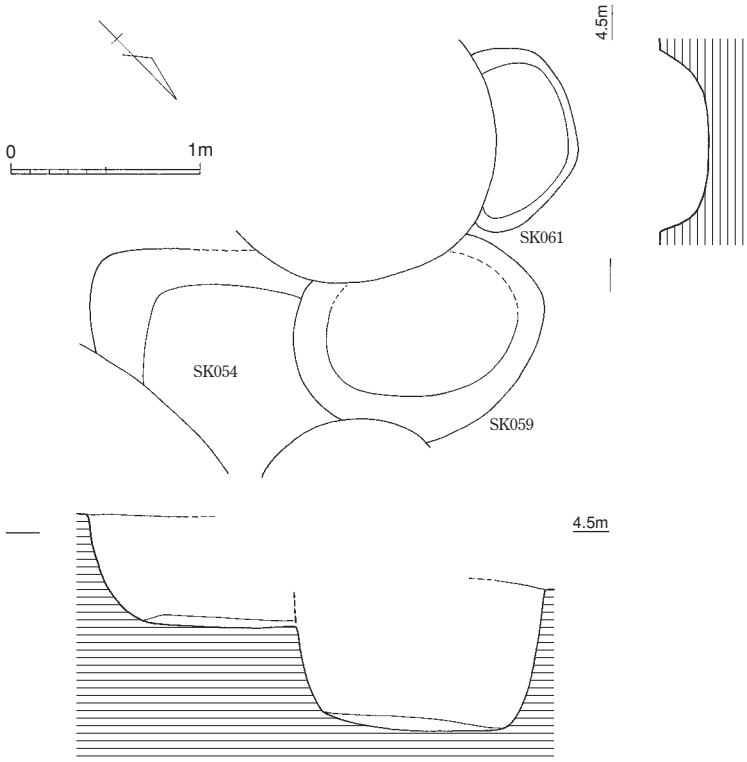


図18　SK054・059・061（1/40）

SK090（図21）　調査区北西部に存在し、一部が調査区外にかかっている。不明な部分も多いが、平面形は長さ３ｍ、幅２ｍのいびつな楕円形を呈するといえるだろう。深さは40cm程。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面はわずかに丸みを帯び、やや凹凸が激しい。この土坑はかなり大形なものであり、これ自体が複数遺構の切り合いによるものである可能性も考えなければならない。埋土は暗褐色、黒褐色砂質土が互層状に堆積したものである。出土遺物より、11世紀後半～12世紀前半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図21）　１～３は白磁である。１は椀の口縁部片で玉縁を有する。椀Ⅳ類。２は皿口縁部片で、端部はわずかに外反する。３は底部片である。椀Ⅱ類に相当しよう。４は黒色土器（Ａ類）。５～８は土師杯、９は皿である。すべて糸切りによるもので、６は底部に板目の圧痕を有する。ちなみに、この土坑では弥生時代中期後半に属する甕の底部片も出土している（11）。

SK095（図22）　調査区中央やや西寄りに位置する。平面は長さ1.9ｍ、幅１ｍの楕円形を呈する。深さ0.3mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面は平坦。この土坑の上層部分からは、大量の土師椀・皿が出土している。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図22）　１～21は土師杯、22～31は皿である。底部はすべて糸切りによる。１・23・25・27・30は底部に板目の圧痕が残る。32～35は白磁である。32・34は皿。32は高台を有し、内面見込み部分の釉は輪状に削り取っている。皿Ⅲ類。33は椀の底部片で、内面見込み部分の釉を輪状に削り取るもの。椀Ⅶ類。35は椀口縁部片で、端部はわずかに外反する。椀Ⅴ類。

SK101（図23）　調査区北東側に位置する。一辺約２ｍを測る方形基調の土坑である。深さは0.8ｍを測る。完掘後の状況では、壁面西側の立ち上がりが急で、東側のそれは緩やかとなり、底面は平坦になっているが、土層を観察すれば、掘り込みのライン（９～11層上面）をみることができ、この土坑が複数遺構の切り合ったものである可能性も指摘できる。出土遺物より、12世紀末～13世紀前半に位置づけることができるだろう。

出土遺物（図23）　１・２・４は龍泉窯系青磁である。１は椀口縁部片で、外器面に片片彫蓮弁文と櫛目文、内器面に片彫草花文と櫛目文をそれぞれ施している。椀Ⅰ－６類。２は椀底部片で、外器

面に鎬蓮弁文を施す。椀Ⅱ類。4は椀底部片で、内面見込み部分に片彫文を施す。椀Ⅰ類に属する。3は白磁皿で、高台を有し、内面見込み部分の釉を輪状に削り取っている。皿Ⅲ類。5は越州窯系青磁の底部片で、平底である。椀Ⅰ類。6～8は土師杯。すべて底部は糸切りである。ところで、この土坑からは弥生時代中期後半の甕口縁部片も出土している（9）。

SK049（図24）　調査区の南西端部に位置するもので、その多くは調査区外にあって、一部のみを調査しているに過ぎない。SK050を切り込んでいる。詳細は不明だが、平面は径1.6ｍ程の円形、も

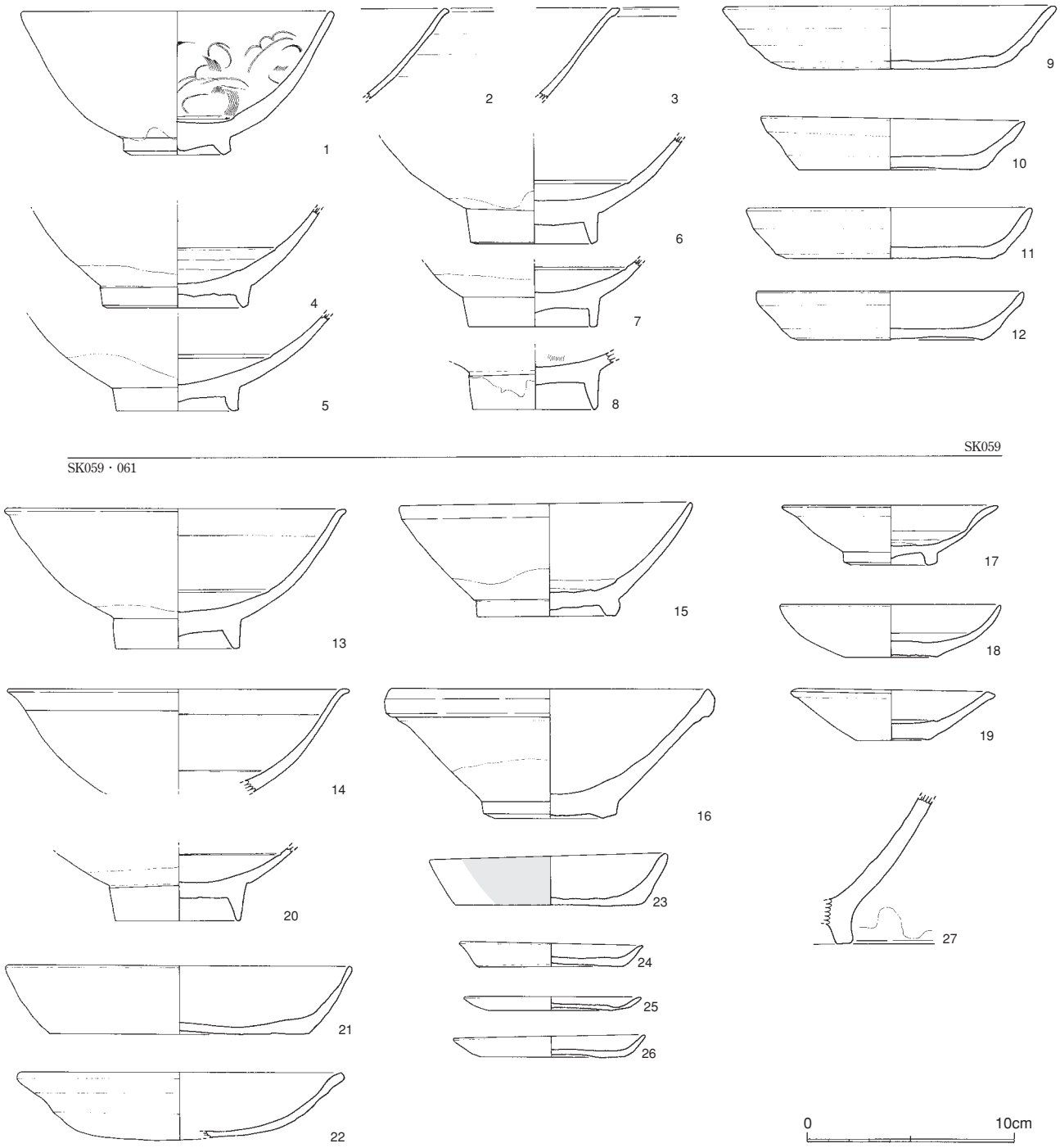


図19　SK059・061出土遺物（1/3）

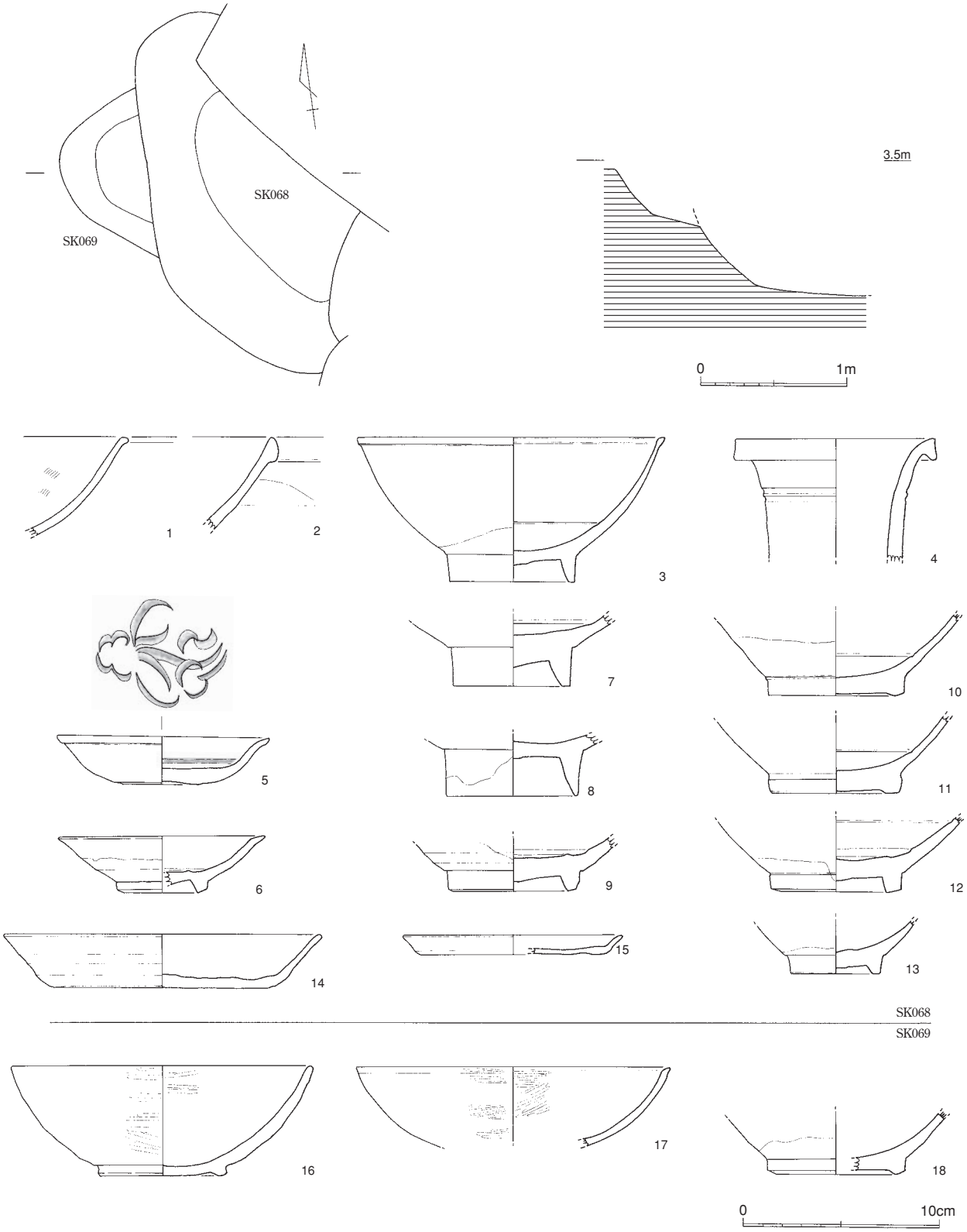


図20　SK068・069（1/40、1/3）

しくは楕円形を呈するものといえようか。深さは1.1ｍを測る。壁面の立ち上がりは西側で急となり、東側は緩やかになっているが、砂丘面に彫り込まれた遺構壁面の脆弱さを考えれば、西側壁面のように、東側のそれも本来は急なものであったのかもしれない。埋土は暗～黒褐色砂質土。出土遺物より、12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図24）　4～7は白磁である。4は椀で細く高い高台を持ち、体部は丸みを有し、口縁端部は水平方向へ張り出している。端面は平坦。椀Ⅴ類に相当する。5は内面見込みの釉を輪状に掻き取ったもので、口縁端部は外方へ張り出している。椀Ⅷ類。6は皿で、底部は平底、口縁部は外方へ折れ曲がる。皿Ⅳ－2類に属する。7は壷等の底部。外側へ緩やかに広がる高台を有する。8は瓦器椀。9・10は土師杯、11は皿で、底部は糸切りによる。13は平瓦。凹面布目、凸面斜格子のタタキ痕が残る。12は褐釉陶器の壷肩部片。暗赤褐色を呈する。薄くシャープな仕上がりである。作りは図14－13の耳壷と類似する。

SK050（図24）　調査区の南西端部に位置するもので、その多くは調査区外にある。詳細は不明だが、SK049とほぼ等しい、平面は径1.5ｍ程の円形、もしくは楕円形を呈するものといえようか。深さは1.1ｍを測る。壁面の立ち上がりは東側では急で、西側では緩やかとなるが、本来は急な掘り込みを有するものであったのだろう。壁面は凹凸が激しい。土層を観察すれば、6・7・8層上面に掘り込みラインをみることができる。SK050では再度の掘削か、もしくは上面からの他遺構の切り込みが想定できる。出土遺物からは12世紀後半に位置づけることができ、SK049との大きな差を認めることはできない。

出土遺物（図24）　1は瓦器椀である。2・3は白磁底部片である。2は細く高い高台を有し、椀Ⅴ類、3は内面見込み部分の釉が輪状に掻き取られており、椀Ⅷ類に、それぞれ位置づけることができる。

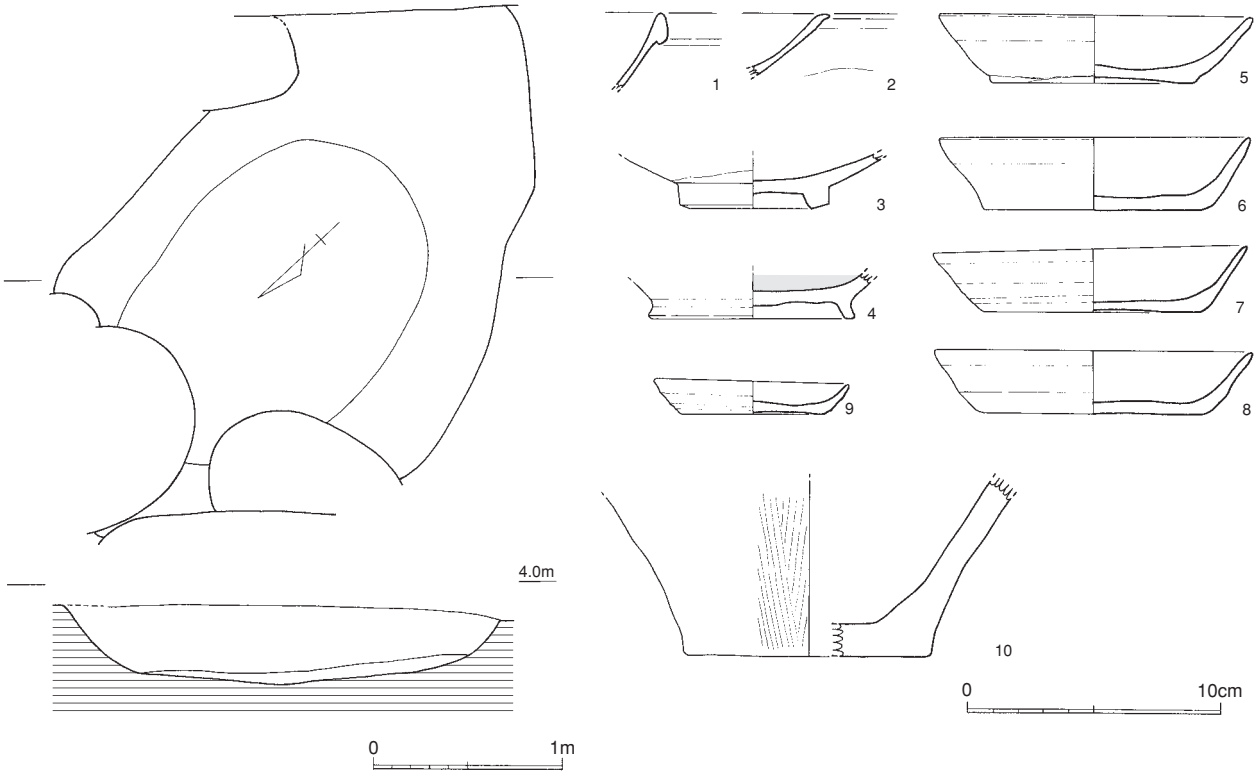


図21　SK090（1/40、1/3）

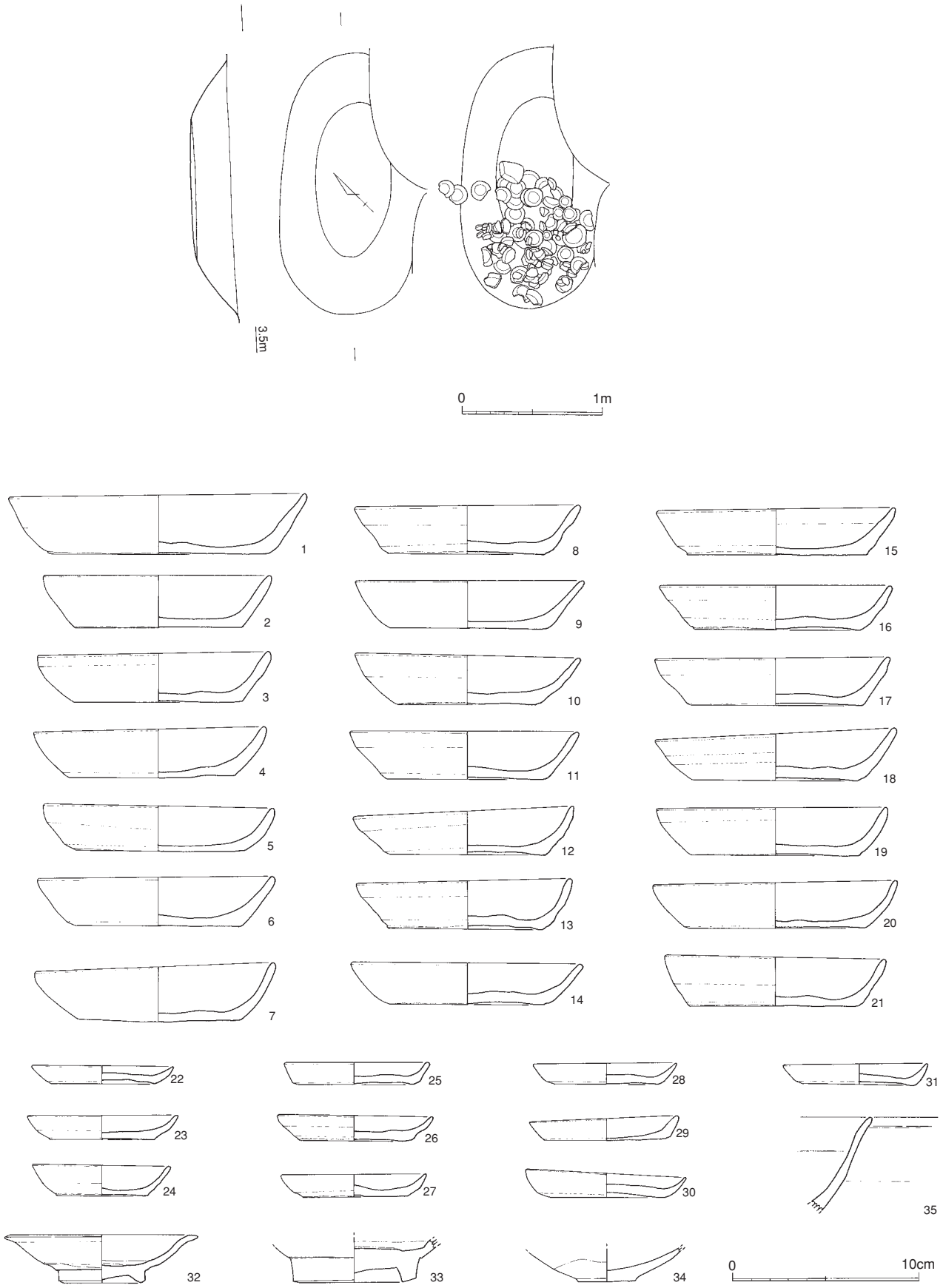


図22　SK095（1/40、1/3）

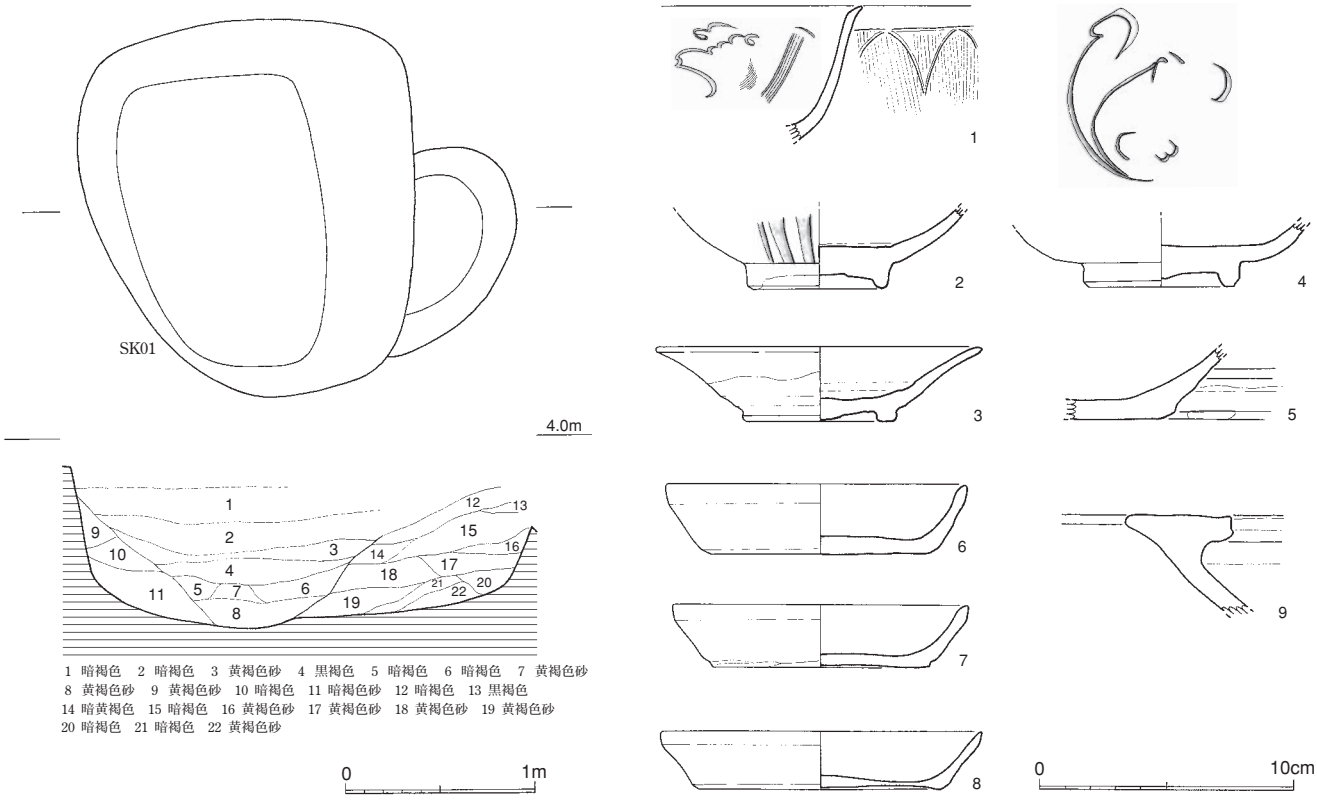


図23　SK101（1/40、1/3）

SK051（図25）　調査区西寄りに存在するもので、平面は径1.8ｍ程のややいびつな円形を呈する。深さは1.3ｍ程を測る。壁面の立ち上がりは急であるが、底近くでは緩やかとなり、底面は丸みを帯びる。出土遺物より、12世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（図25・26）　図25には土師杯、皿等を示している。1～3は土師杯、4～8は皿である。いずれも底部は糸切りによる。図26には輸入陶磁器、瓦を示した。1～6は白磁である。1～3は椀口縁部片。1・2は端部を水平方向へ張り出させるもので、椀Ⅴ類に相当する。3は大振りな玉縁を有するもので、椀Ⅳ類。4～6は椀底部片。5は内面見込み部分の釉を輪状に、4はすべてを掻き取っている。共に椀Ⅷ類に属する。6は高台内をわずかに削るのみで、底部が厚みを有しているもので、椀Ⅳ類に相当する。7は龍泉窯系青磁椀で、体部はふくらみを有している。内器面には片彫文と短い櫛目文を施している。椀Ⅰ類。8・9は同安窯系青磁で、8は椀、9は皿である。共に内器面にはヘラ描文とジグザグ状の点描文を有する。10は丸瓦で、凹面には布目、凸面には斜格子文のタタキ目を有している。11は軒平瓦で、波状押圧文を有する。尚、この土坑からは弥生時代後期の甕口縁部片（図25－9）も出土している。

3）SD（溝）

今次調査において、溝の検出は少ない。後述するSD064の他はSD102・105が存在するのみである。SD102・105は調査区北側の隅で検出し、北西－南東方向に伸びるもので、調査区内では2～3ｍほどしか検出できていないが、その延長上に認められる段落ち部分をこれら溝との関連でみる限り、本来は調査区を横断してのびていた可能性が高い。SD102・105共に深さ20～30cm程しか残っておらず、遺存状況は悪い。図3ではSD102、SD105が切り合いを有する別個の溝であると認識し

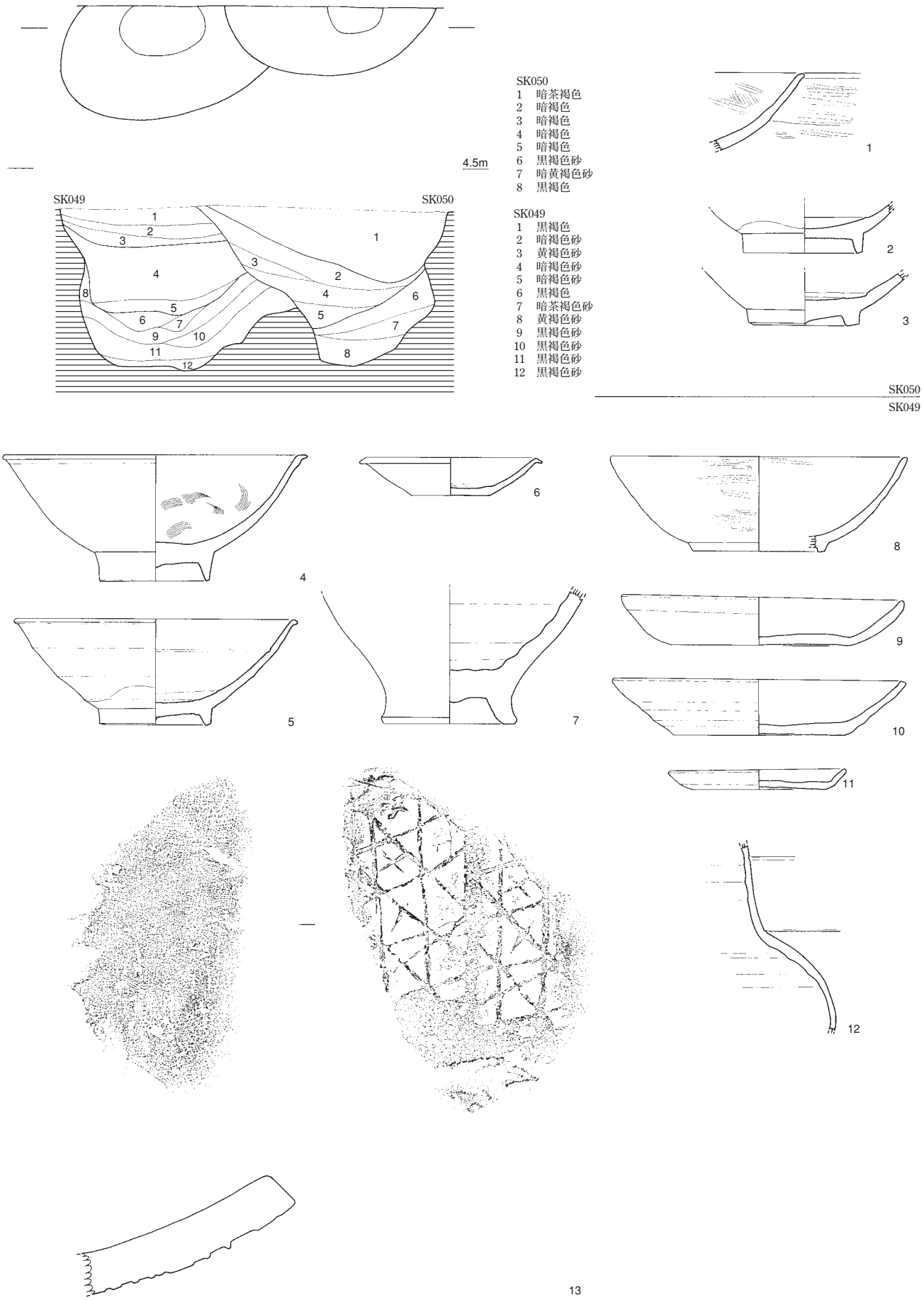


図24　SK049・050（1/40、1/3）

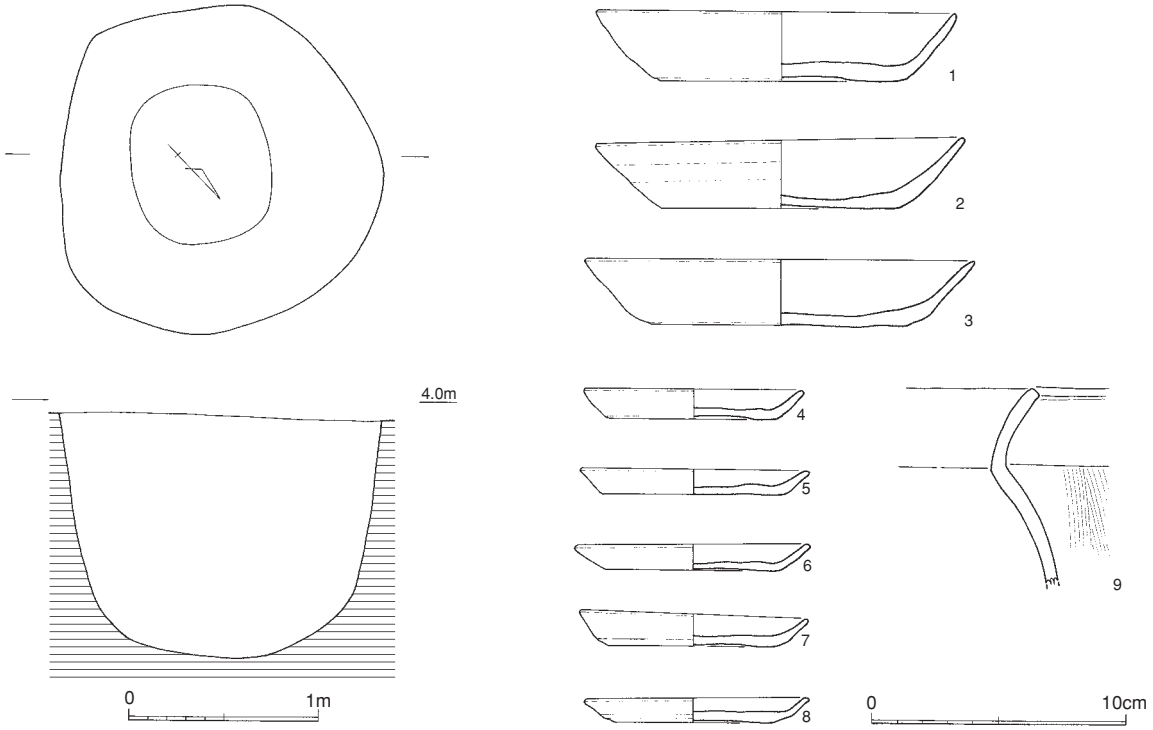


図25　SK051（1/40、1/3）

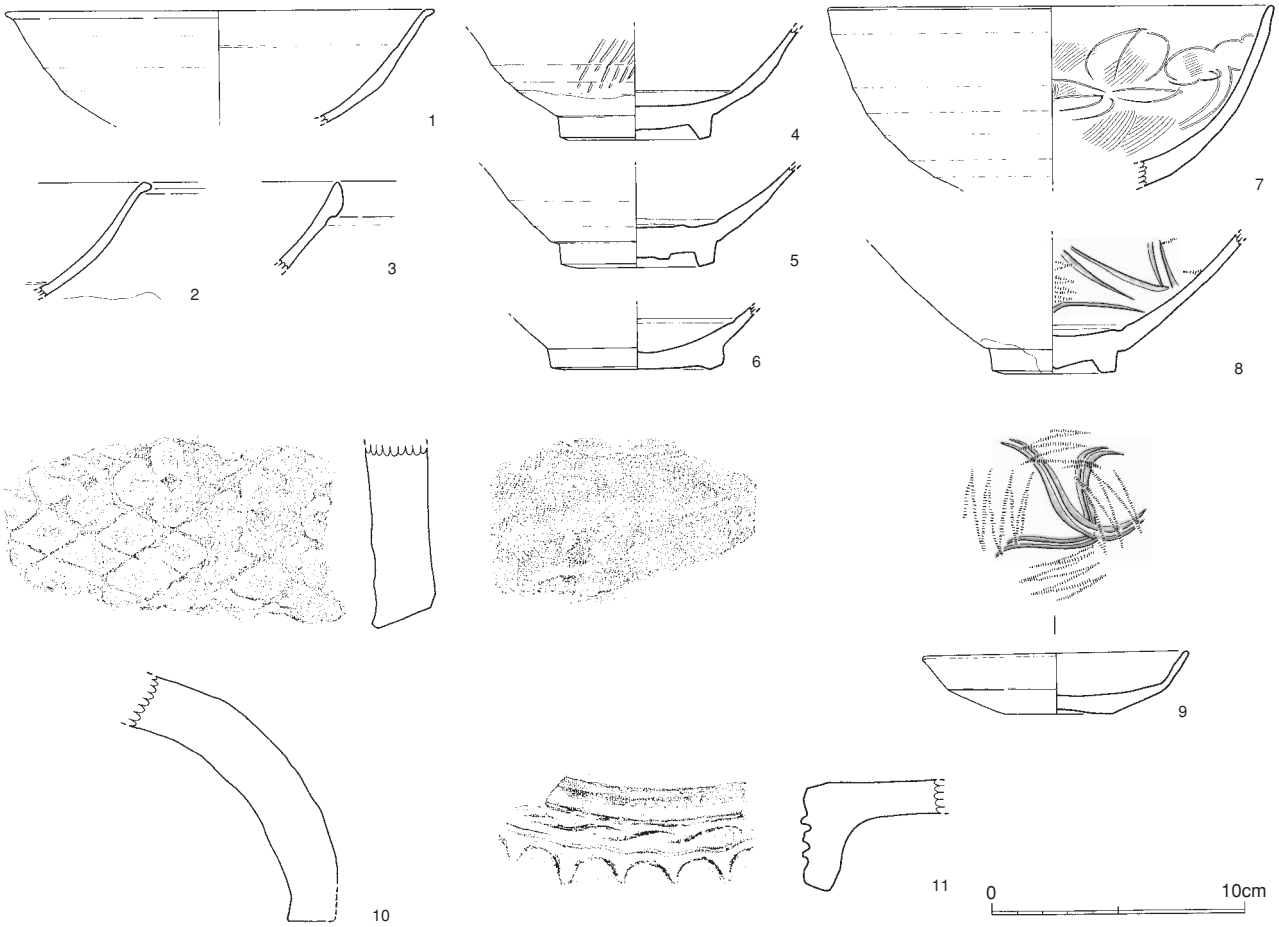


図26　SK051出土遺物2（1/40、1/3）

ているが、明確なものではなく本来は１条の溝であった可能性も否定できない。出土遺物はごくわずかで、所属時期は不明である。

SD064（図27）　調査区中央東寄りに存在するもので、幅は２～2.5ｍ、深さ40～50cmを測る。SE063・082を切り込んでいる。溝は東西方向に流れ、東側は調査区際で途切れており、長さ５ｍ程までは確認できたのだが、それから西側へどこまで延びるのかは確認することができなかった。溝の埋土は黄褐色砂質土の間層を挟み、上下に暗－黒褐色土層が存在しており、その上部の暗－黒褐色土層中からは土師椀・皿を中心とした多くの遺物が出土している。

出土遺物（図28）　１～５は白磁である。１・２は椀口縁部片。１は玉縁を有し椀Ⅳ類に属する。２は体部が丸みを有し、口縁端部が外方へ張り出すもので、椀Ⅴ類に位置づけることができる。４は椀である。浅い杯部を有し、口縁端部はわずかに外反する。高台は細く、内器面には短い櫛目文を有している。５は椀底部片。体部は丸みを有し、高台は細い。３は皿。底部は平底で、杯部は口縁近くで内湾し、端部はわずかに外反する。６は龍泉窯系青磁の底部片。内面見込み部分には片彫花文を施す。椀Ⅰ類に相当する。31・32は青磁。31は耳壷で、把手の上には1条の沈線を施す。32は壷等の底部であろうか。台部はわずかに外反する。７～15は土師杯、16～30は皿である。底部はすべて糸切りによる。33は瓦玉。中央部に穿孔が施される。

4）ST（甕棺墓）

甕棺を１基のみ検出できた。弥生時代終末に位置づけることができる。この他、弥生～古墳時代に属する遺構はわずかで（SK126、図３青線遺構など）、顕著な遺構は見つかっていない。

ST079（図29）　調査区西側の際で、暗黄褐色砂層の切り下げを行っている際に検出したもので、調査のために設置したシートパイルのため、一部が破損する以外、よく原型を保っている。主軸の方向はS－47°－E。単棺で、埋置角度31°と墓坑内に斜位に棺を納めている。墓坑の掘り込みは判然としない。甕棺の内部には数点の歯が存在していたが、腐食がひどく取り上げることができなかった。

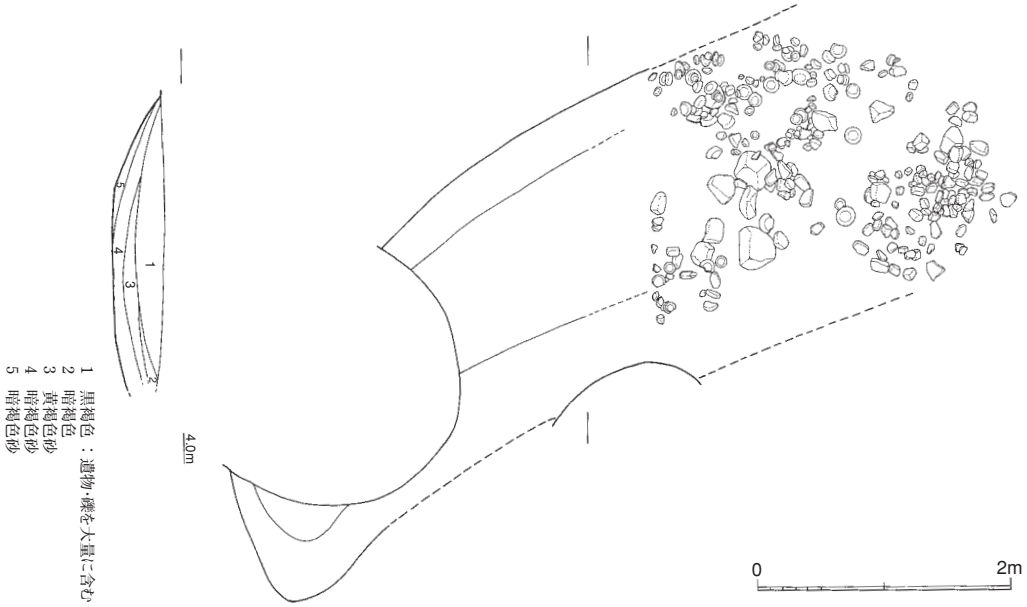


図27　SD064（1/60）

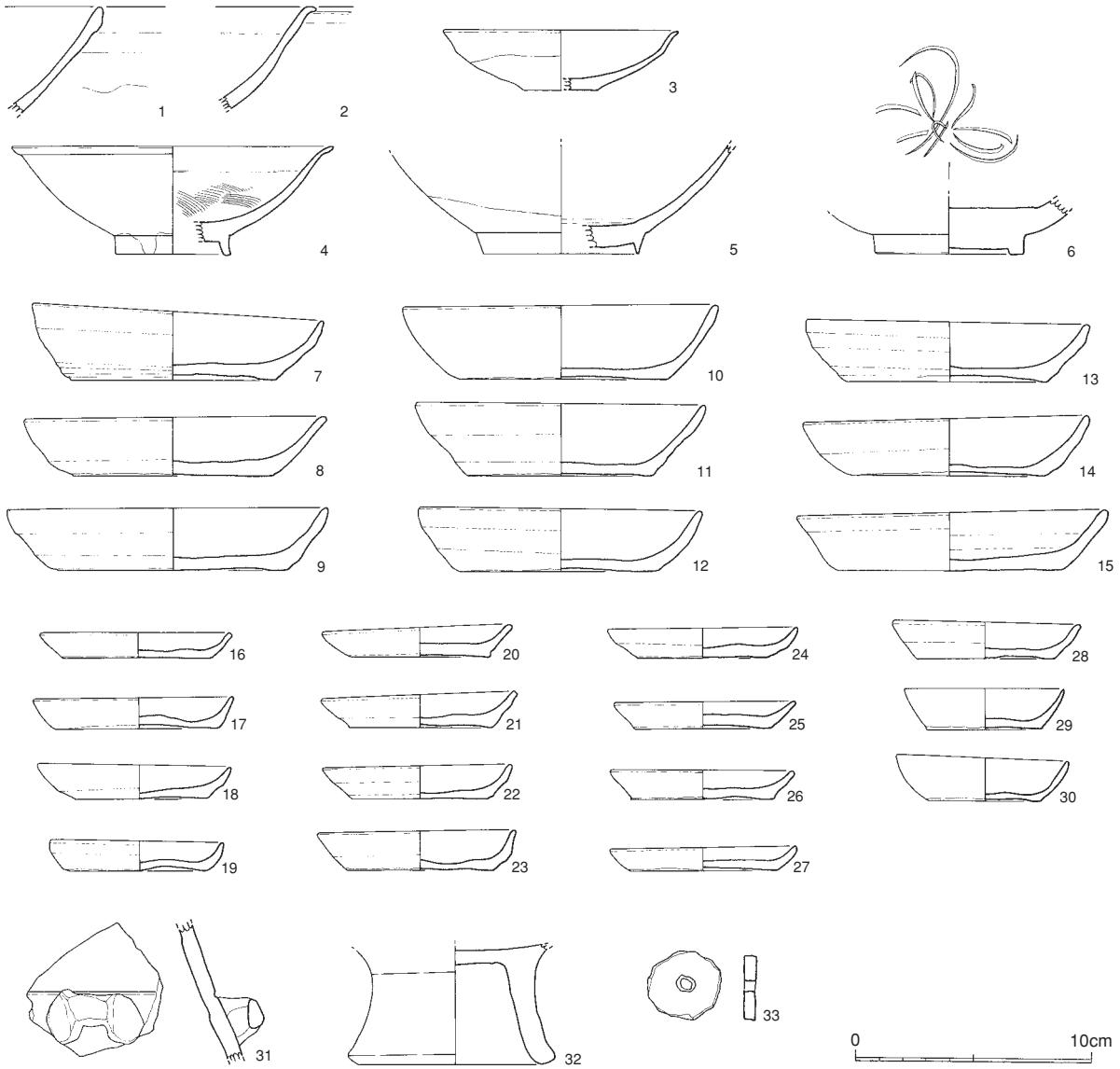


図28　SD064出土遺物（1/3）

出土遺物（図29）　口径42.7cm、器高69.0cm、頸部径39.3cmを測る。口縁は「く」の字形に外反し、頸部には断面三角形の突帯を一条巡らしている。胴部は倒卵形を呈し、最大径は中央部よりもやや上方にある。内・外面共にハケ目調整を施す。底部は小さな平底。

5）その他の遺物（図30～33）

銅銭（図30）　26枚の銅銭が出土した。銭銘と枚数を表1に、遺構別の出土銭文表2に示す。図30の数字は表2のものに対応する。20・25等腐食が著しく従来の錆取りや透過X線画像での文字判読が困難であったものに関しては、研ぎ出し（片多2005）により銭銘を解読した。内訳は北宋銭（7割）と寛永通寶が占め、これは他の博多遺跡群を追従するものである。ただ、出土銭の錆落とし及びクリーニングを行う過程で、6点中3点の寛永通寶の表面に籾殻のようなものが付着しているのが観察された。同定作業は行っておらず、かつ偶然とも考えられるが追記しておく。（片多雅樹）

片多雅樹2005「博多遺跡群第144次調査出土銭について」『博多104』福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集

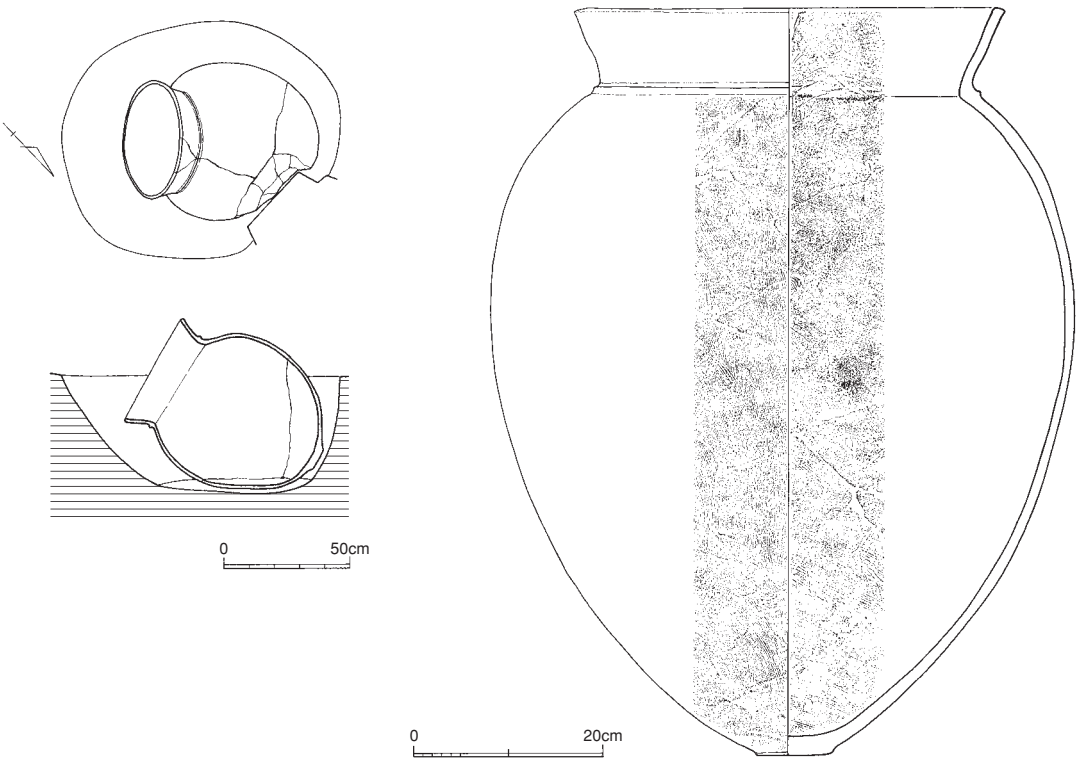


図29　ST079（1/30、1/8）

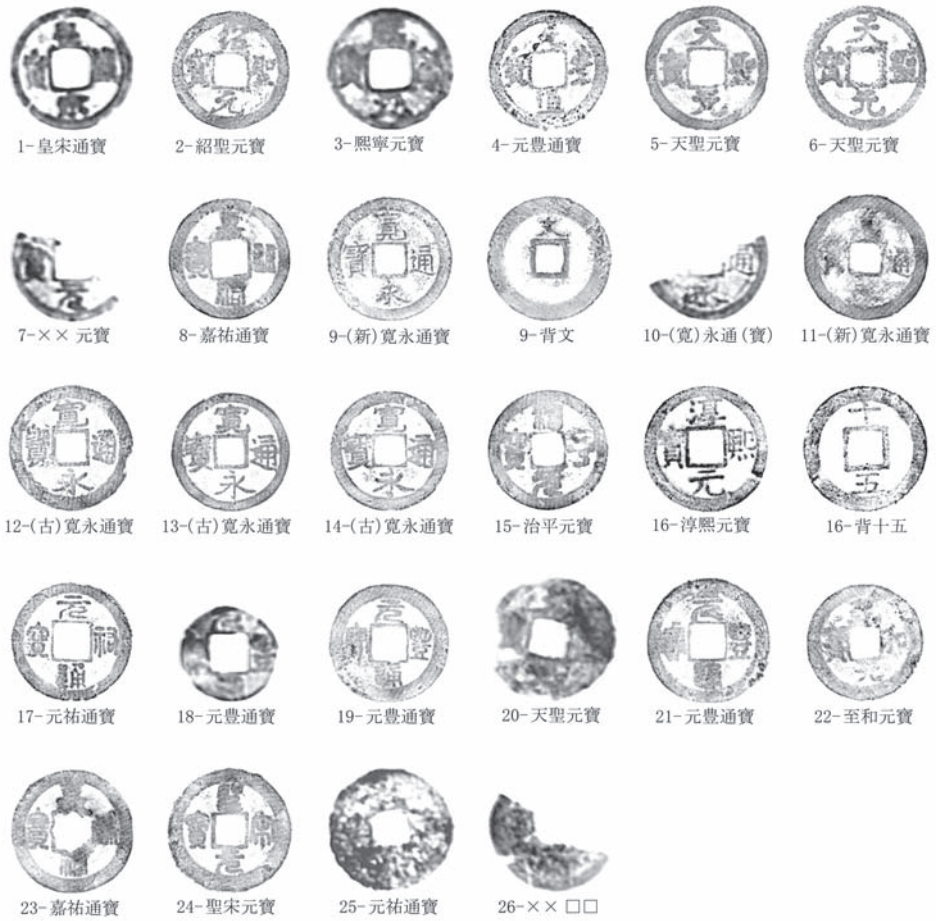


図30　銅銭（2/3）

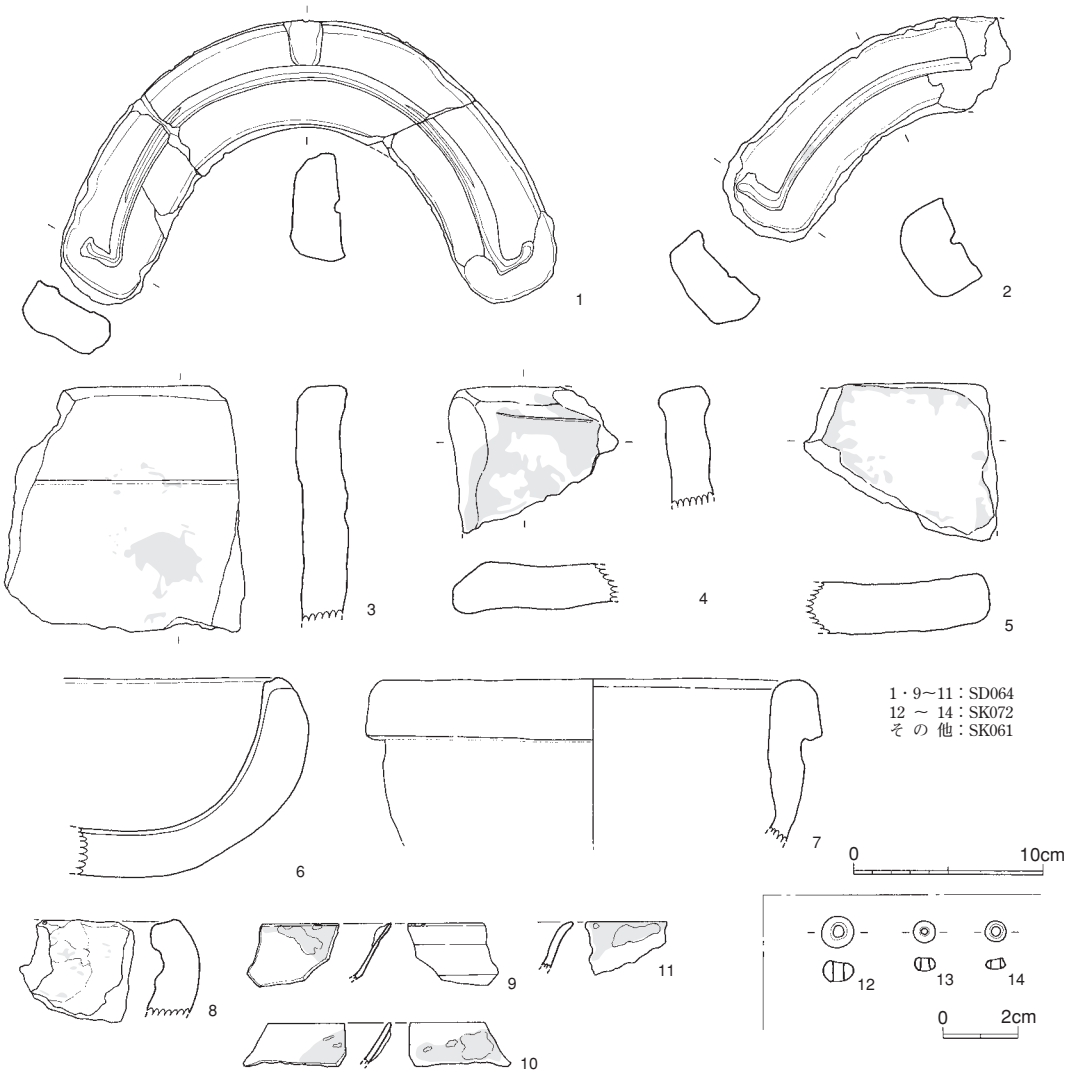


図31　鋳造関係遺物・ガラス製品（1/4、1/2）

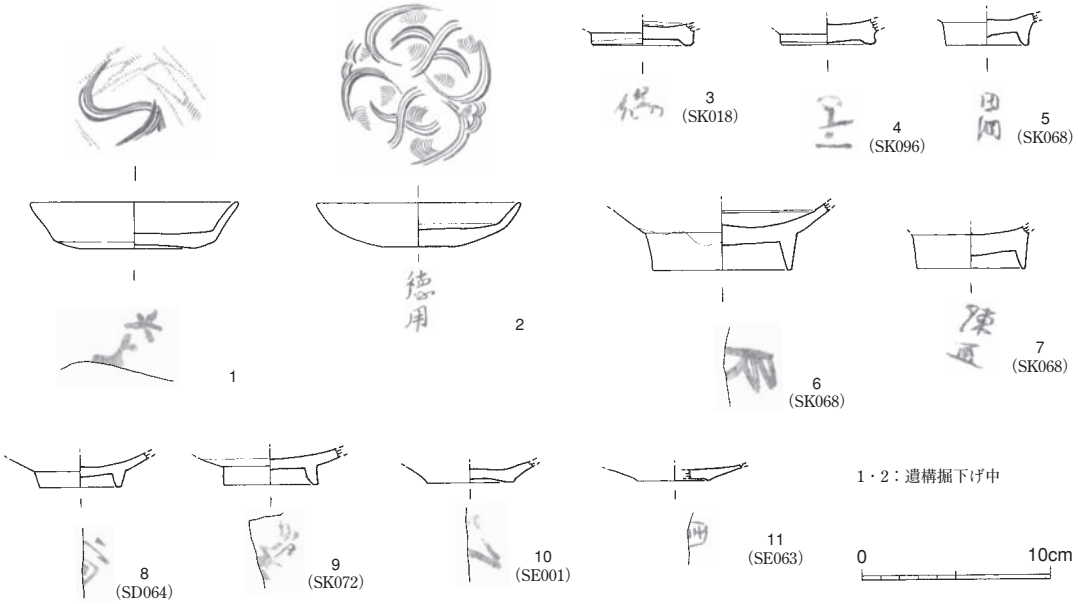


図32　墨書土器（1/4）

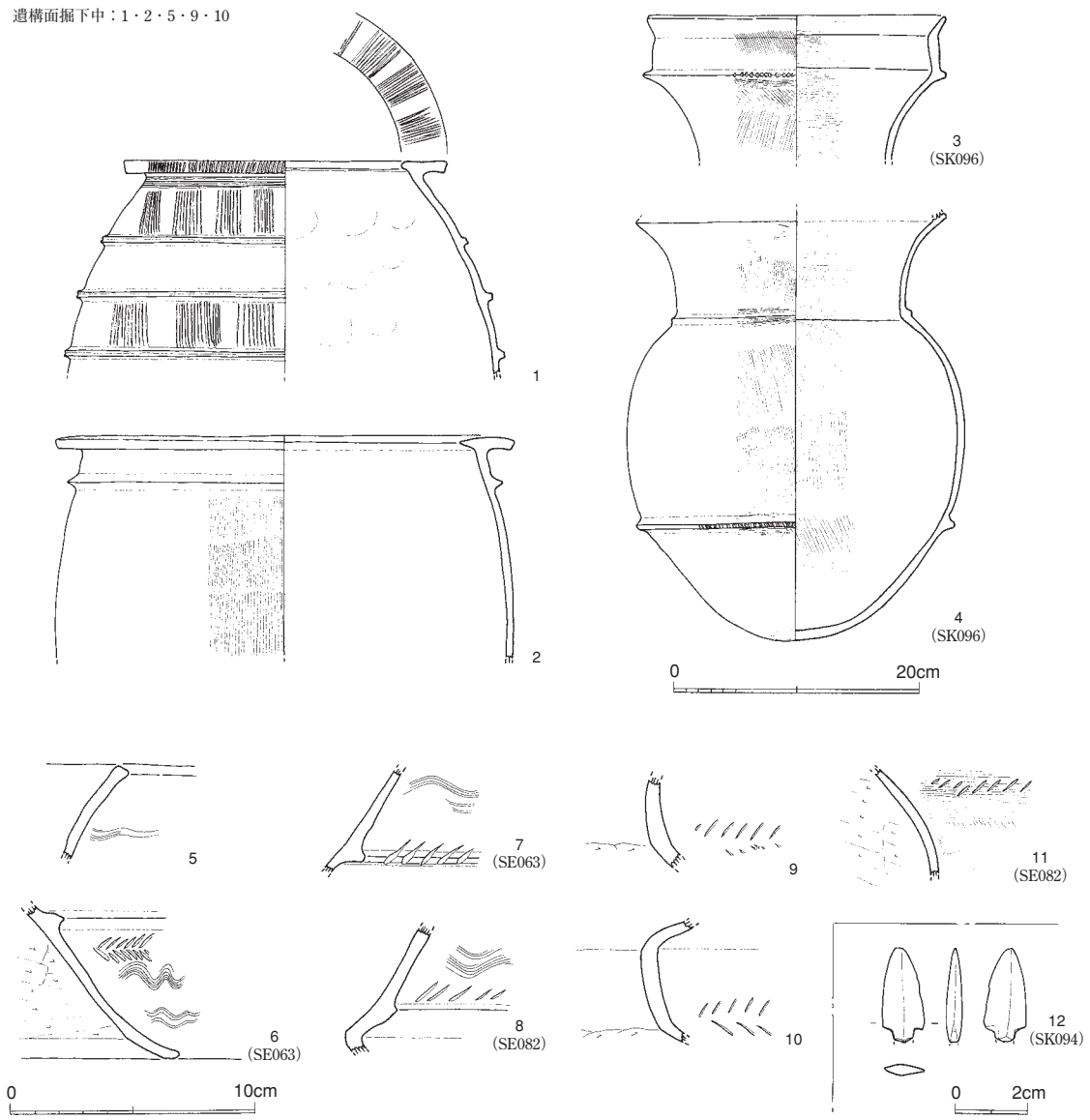


図33　弥生・古墳時代遺物（1/6、1/3、1/2）

銅製品鋳型（図31）　銅製品の鋳造に関する遺物が、SK061およびその周辺（SD064）で検出できた。調査時の不手際で、鋳造遺構であるという認識が遅れ、気づいたときにはSK061をほぼ完掘してしまっていたため、埋土の精査は行っておらず、銅滓等は採集していない。ただ、SK061にはごく一部に被熱の痕跡が残っていたこと、SK061の周辺にのみ鋳造関係の遺物が集中していることからも、この土坑において、銅製品の鋳造が行われたのであろう。

1・2・6は鋳型である。1・2は鍋等把手の鋳型。1はSD064、SK061双方から出土し、接合できたものである。弧状を呈し、上面には湯口が認められる。鋳造面には厚さ数mmの真土を貼る。鋳型の胎土にはスサを多く含んでいる。鋳型側面の周囲には、合わせ目となる沈線状の切り込みが認められる。2の一部には緑青が付着している。6は鍋等の鋳型であろう。内面上端は段をなしている。土製で内面および上端には厚さ0.2～0.5cmの真土を貼り付けている。鋳型の胎土には多くのスサを含む。3～5は鋳型もしくは炉壁だろうか。厚さは2.5cm程を測り、内面及び端面には銅が付着している。8は坩堝の破片である。内面および上端部には銅滓が認められる。7も鋳造に関係するものであろう。土製で、胎土には多くのスサを含む。真土は認められない。上端は外側へ帯状に

肥厚する。

尚、SD064からは銅滓の付着した陶磁器が3点出土している。出土位置から考えても、これらの資料がSK061における鋳造と関連するものである可能性は極めて高い。9は白磁の口縁部片で、口禿のものである（Ⅸ類）。10・11は青磁の口縁部片である。

ガラス製品（図31）　SK072からはガラス玉が出土している（12～14）。今回ガラス玉は3点のみ図示しているが、SK072からは玉未製品およびガラス滓も出土している。紙幅の関係でSK072については個別の解説を行っていないため、ここでその概要について記すことにする。SK072は調査区中央やや北寄りに位置する土坑で、SD105を切り込んでいる（図3）。径1.1ｍ程の円形を呈し、深さは50cmを測る。ガラス玉の他、白磁（椀Ⅳ・Ⅴ類）、瓦器椀、滑石製石鍋等が出土しており、土坑の時期は12世紀後半に位置づけることができるだろう。

12は外径8.4mm、孔径2.6mmとやや大形のもので、淡緑色を呈する。表面は白みがかり、表面にはひび割れも認められる。13・14はやや小形の製品である。13は緑青色を呈し、12と同じく表面がやや白みがかる。外径5.6mm、孔径2.1mmを測る。14はガラスが螺旋状を呈したもので、その形状はいびつである。ガラス自体は淡緑色を呈するが、表面のほとんどが白色化している。外径5.5mm、孔径2.3mmを測る。

墨書土器（図32）　図32には、今次調査で出土した墨書土器を集成した。出土位置については図中に示している。その文字については判読できないものが多い。

2は同安窯系青磁の皿で、底面に「徳用」との文字を記している。7はⅤ類の白磁椀で、高台の内面に「陳□」の文字を記している。

弥生・古墳時代の遺物（図33）　今次調査ではST079・SK126以外に、弥生時代～古墳時代に相当する遺構を検出することはできなかった。ただ遺構面を掘り下げ、黄褐色砂層上で検出したピットなどはこの段階に相当する可能性があるだろう。いずれにせよ、遺構の密度としては決して濃いものではない。遺物に関しては、いくつか採集することができたので、以下に報告することにしたい。

1・2は甕である。1は鋤先状の口縁部を有し、口縁部へ向けて緩やかに内傾しており、胴部には3条の突帯をみることができる。口縁外面の端部には刻目を施し、口縁上面及び外器面突帯間には暗文を施す。外器面には丹塗り。遺構面の掘り下げ中に出土。2は鋤先状の口縁部を有し、口縁部下には断面三角形の突帯を1条巡らしている。外器面には縦方向のハケ目調整を施す。1と同じく遺構面の掘り下げ中に出土。1・2は共に弥生時代中期後半に位置づけることができる。

3・4は二重口縁壺である。3は口縁部片で、1次口縁は緩やかに広がりをみせた後、垂直方向に立ち上がり、口縁端部において外方へ折れ曲がっている。1次口縁の外面端部には刻目を施す。頸部の上半には粗いタタキ目様の条痕が認められる。内・外器面ともハケ目調整を施しているが、1次口縁端部下にのみ、横方向の粗い削り状の条痕が認められる。外器面には一部丹塗りの痕跡が残っている。4は1次口縁より上の口縁部を欠損するが、形態、調整等の共通性をみれば、3のような形態の口縁部を有していたのであろう。ただ、4の1次口縁の外面端部には刻目を施していない。丸底で、頸部および胴部やや下方にそれぞれ突帯を有しており、下方の突帯には刻目を施している。頸部の突帯は断面三角形胴部のそれは断面台形を呈する。内・外器面ともハケ目調整を施しているが、胴部突帯下には粗く、深い横方向の条痕が認められる。外器面にはわずかに丹塗りが残る。3・4共に久住猛雄氏による土師器編年（久住1999）ⅠＢもしくはⅡＡ期に位置づけることができるだろうか。

5～8は鼓形器台である。5は口縁部片で、外器面に波状文を施す。内・外器面に丹塗りの痕跡

が認められる。6は脚部片で、突帯下の外面上には綾杉文、その下には波状文を2段にわたって施している。内面にはヘラケズリ調整で、裾端部にのみナデ調整を行う。外器面には丹塗りがわずかに残る。7・8は受部片。7・8共に突帯上部に刺突文を有し、その上方には波状文を施す。内器面は丁寧なナデ調整。いずれも一部に丹塗りが残る。以上、鼓形器台のいずれも久住編年ⅡB期に位置づけることができる。

9～11は二重口縁壺である。9・10はいずれも頸部片で、同一個体になる可能性がある。頸部外器面には綾杉文を施す。内・外器面共に丹塗りの痕跡が残る。11は胴部片である。肩部にはカキ目調整、後に刺突文を施している。内器面にはヘラケズリ。これら二重口縁壺は久住編年ⅡB期に位置づけることができる。

尚、その他にも青銅製品が1点出土している。12は銅鏃である。柳葉形を呈し、鏃身部には鎬を有する。茎は一部を欠損しており、全体的に摩耗が進んでいる。SK097から出土しているが、SK097は12世紀頃の土坑であり、この資料は混入品であろう。

文献

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ－庄内式併行期の土器生産とその動き－ 庄内式土器研究会

Ⅳ．まとめ

ここでは今次調査の成果についてまとめることにする。

遺構の変遷

今次調査で確認された遺構で確実に遡りうるものは弥生時代後期末である（ST079）。この他にも弥生時代中期後半～古墳時代前期前半までの遺物が採集されており、決して密度の濃いものではないだろうが、これら時期の遺構が存在していた可能性は高い。また、古墳時代の遺物は器台、壷等特定器種への明らかな偏りを示しており、このことは周辺に当該期の墓域が存在した可能性を示しているといえるだろう。今回調査を行った遺構の主体を占めるのは、白磁（椀Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類）を主体とし、龍泉窯系青磁（Ⅰ類）や同安窯系青磁が若干含む、12世紀後半を中心とする時期のものである。この後、13～14世紀の遺構は少ないが、次に述べるSK061のような特徴的なものが存在する。

銅製品鋳造関係遺物・遺構について

銅製品の鋳造に関する遺構としてSK061がある。調査の不手際で十分な調査を行うことができなかった。鋳造時期については、銅滓の付着した陶磁器片が良い手がかりを与えてくれるだろう。これらの陶磁器は13世紀後半～14世紀前半に位置づけることができるものであり、鋳造時期はこれ以降に行われていたと想定することができる。当調査地点の存在する冷泉町周辺には多くの銅製品鋳造遺構・遺物が存在する。第80次調査（吉武編1996）や第139次調査（長家編2004）などにおいて発見された遺構、遺物がそれであり、第80次調査時に検出された「歓喜天像」の鋳型は注目すべき資料であるといえる。また、多くの遺構、遺物が出土した第97次調査においては、生産の実際を含めた「場」の復元が試みられている（久住編1998）。その他、今次調査でSK072から出土したガラス製品等の存在は、周辺で製品の生産が行われたことを示しているのかもしれない。

文献

吉武　学編1996『博多51』－博多遺跡群第80次調査報告－　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第448集
久住猛雄編1998『博多63』－博多遺跡群第97次調査の概要－　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第558集
長家　伸編2004『博多98』－博多遺跡群第139次調査報告－　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第807集

図32－1・2

出土遺物

表1　鋳銘別出土銅銭一覧

銭　銘	初鋳年	時代	枚数	銭　銘	初鋳年	時代	枚数	銭　銘	初鋳年	時代	枚数
天聖元寶	1023	北宋	3	熙寧元寶	1068	北宋	1	淳熙元寶	1174	北宋	1
皇宋通寶	1039	北宋	1	元豊通寶	1078	北宋	4	(古)寛永通寶	1636	江戸	3
至和元寶	1054	北宋	1	元祐通寶	1093	北宋	2	(新)寛永通寶「背文」	1668	江戸	2
嘉祐通寶	1057	北宋	2	紹聖元寶	1094	北宋	1	寛永通寶		江戸	1
治平元寶	1064	北宋	1	聖宋元寶	1101	北宋	1	欠　　損			2

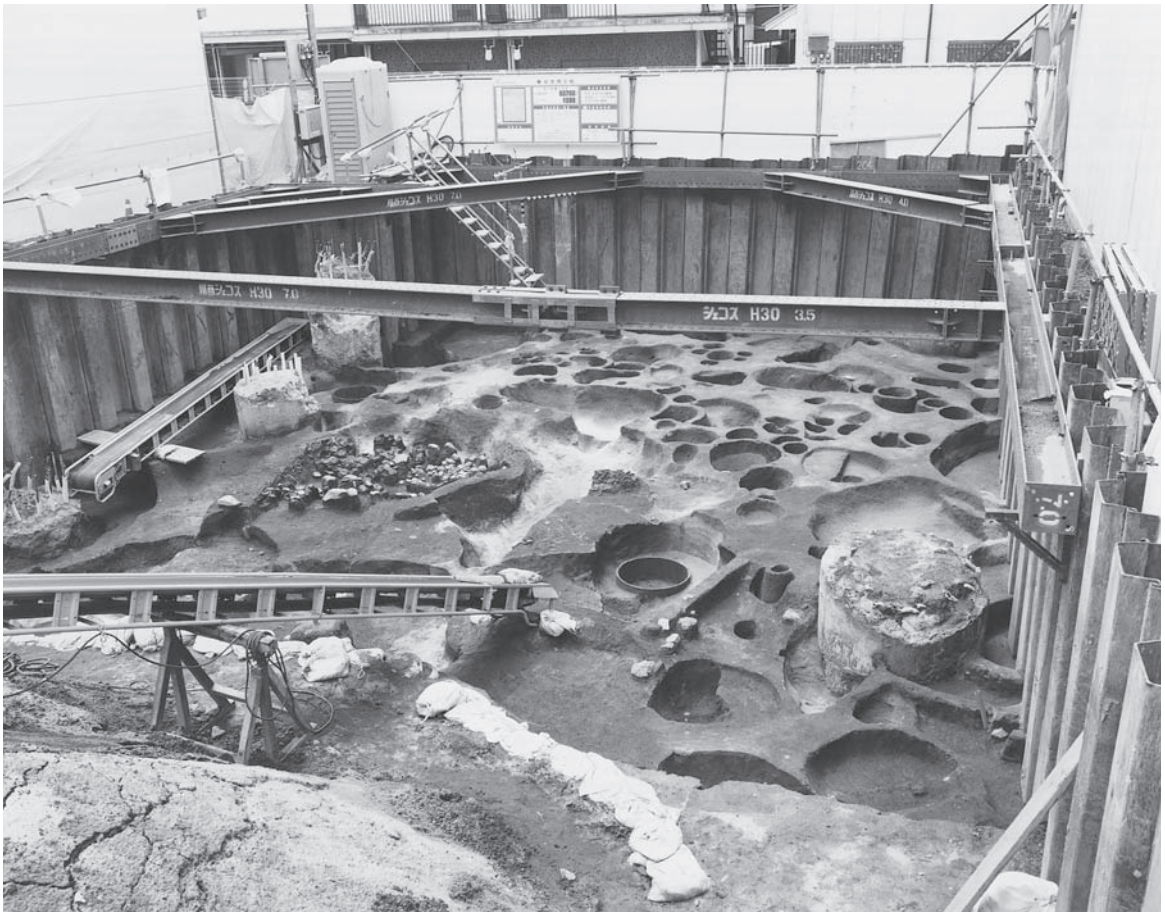
計26枚

表2　遺構別出土銅銭一覧

No.	出土遺構	銭　銘	備　考	No.	出土遺構	銭　銘	備　考
1	SD064	皇宋通寶	6枚銹着	14	トレンチ中	寛永通寶	(古)寛永　枠黒(漆?)
2	SD064	紹聖元寶	6枚銹着	15	遺構検出中	治平元寶	
3	SD064	熙寧元寶	6枚銹着	16	SK031	淳熙元寶	背「十五」
4	SD064	元豊通寶	6枚銹着	17	SK031	元祐通寶	
5	SD064	天聖元寶	6枚銹着	18	遺構検出中	元豊通寶	小型縁無し　私鋳銭か
6	SD064	天聖元寶	6枚銹着	19	SK090	元豊通寶	
7	SD064	××元寶	欠損	20	SK090	天聖元寶	
8	SE063	嘉祐通寶		21	SK097	元豊通寶	
9	SK018	寛永通寶	(新)寛永　背「文」	22	遺構検出中	至和元寶	
10	SK018	(寛)永通(寶)	欠損　もみ?付着	23	遺構検出中	嘉祐通寶	星孔
11	SK018	寛永通寶	(新)寛永　背「文」　通の下に横棒	24	遺構面掘下げ	聖宋元寶	
12	SK018	寛永通寶	(古)寛永　もみ?付着	25	遺構面掘下げ	元祐通寶	
13	トレンチ中	寛永通寶	(古)寛永　もみ?付着　枠黒(漆?)	26	遺構面掘下げ	××□□	欠損

□：判読不能　×：欠損　(　)：□又は×だが限定できる

図版１



調査区南東側（北西から）

調査区南東側遺構分布状況（東から）

調査区北西側（南から）

調査区北西側２（南西から）

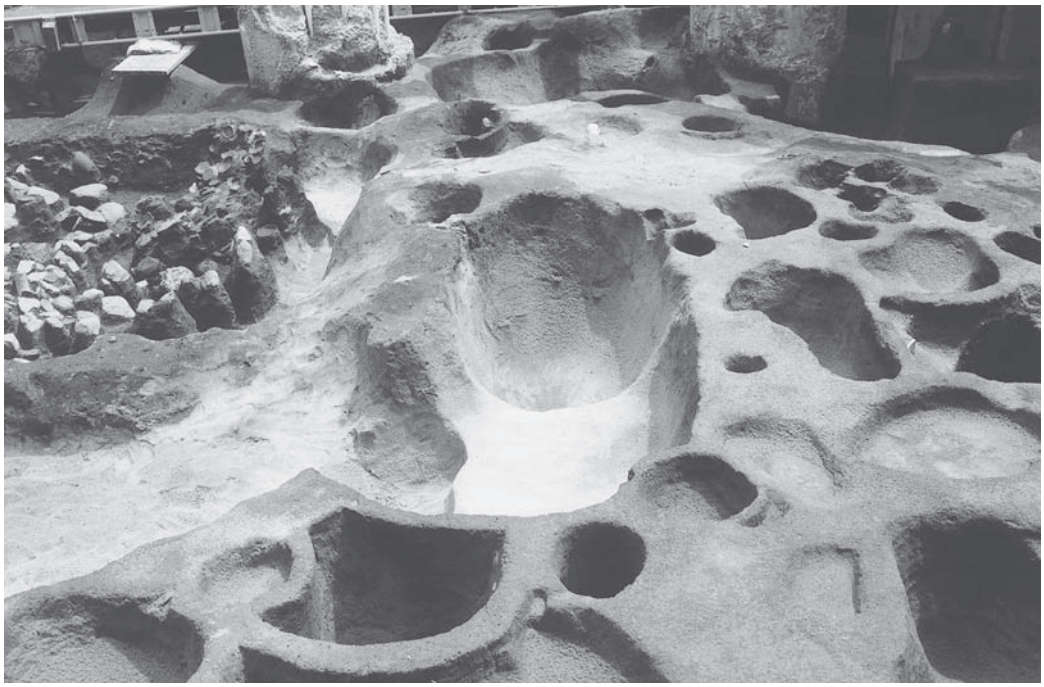
図版３

SE068（南東から）

SE068土層（南東から）

SE106（南東から）

SK007（北東から）



SK018（北東から）

SK049･050･051（北から）

図版５

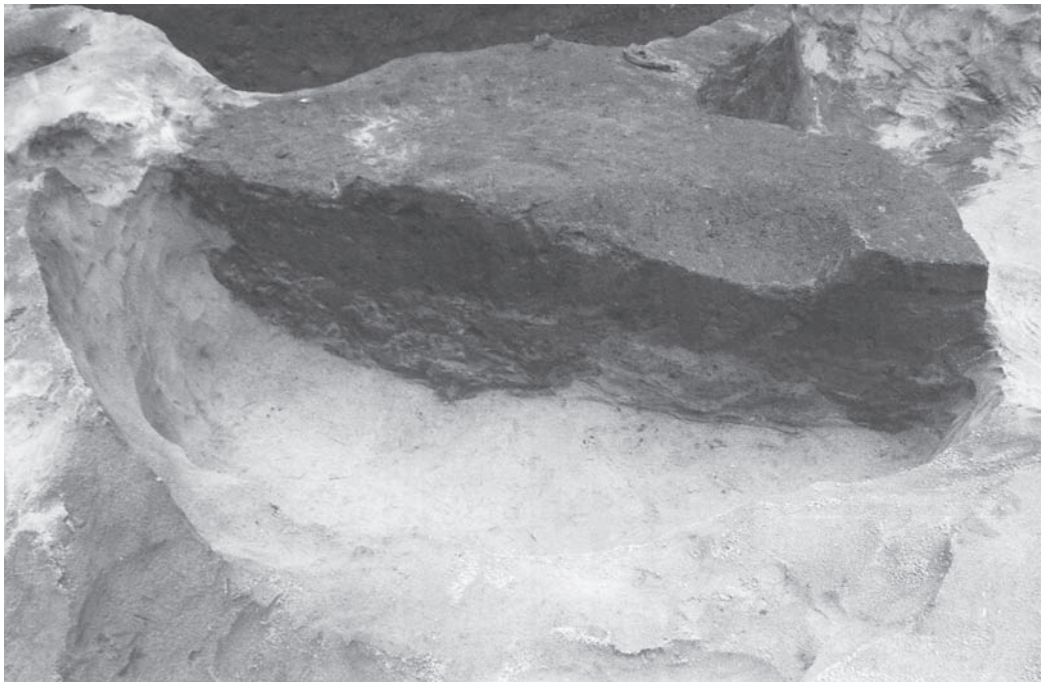
SK031（南から）

SK098･100･127（南から）

SK095遺物出土状況（南から）

SK049・050（東から）

SK068・069（南西から）



SK101（西から）

図版７

SD064（西から）

ST079検出状況（西から）

ST079完掘（西から）

報告書抄録

ふりがな	はかた
書名	博多107
副書名	博多遺跡群　第148次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第893集
編著者名	藏冨士　寛
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1　TEL 092-711-4667
発行年月日	2006. 03. 31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
博多(はかた)遺跡群	福岡県(ふくおかけん)福岡市(ふくおかし)博多区(はかたく) 冷泉町(れいせんまち)488番2	4013	0121	33° 24′ 45″	130° 35′ 44″	20040720 ～ 20040928	204	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落 墓地	古代末～中世 弥生	井戸 土坑 溝 甕棺墓	輸入陶磁器 国産陶磁器 土師器 瓦器・瓦 銅銭・鋳型 弥生土器	

要約

今次調査では11世紀後半～12世紀にかけての時期を主体とする数多くの遺構を検出することができた。加えて、弥生時代終末の甕棺墓を発見できたことは大きな成果であるといえる。今回、弥生・古墳時代に相当する顕著な遺構は検出できなかったが、古墳時代の鼓形器台や二重口縁壺の出土は、当該期における墓域が周囲に存在した可能性も考えなければならない。

博多107

－博多遺跡群　第148次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第893集

2006(平成18年)年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10－5

遺跡名	遺跡略号	調査番号
博多遺跡群第148次	HKT－148	０４３６